大湖	デモクボナイ	三	五〇〇	一〇〇	昭和一八・三	二一五	一二五	—	二一五
	ルブン	·三	四〇〇	一九二	同	二〇七	一五〇	—	二〇七
	タイアン	三六	一,五〇〇	三〇〇	同	三二五	一五〇	—	三二五
	マビルハ	二七	一,二〇〇	三〇〇	同	三一八	一六〇	—	三一八
	スル1	三〇	一,二〇〇	三〇〇	同	三一〇	一六七	—	三一〇
	マナバン	二九	一,二〇〇	三〇〇	同	三二三	一〇七	—	三二三
	マバトアン	二三	五〇	一三	同	一四	一一七	—	一四
	パカリ	一四	五〇	五〇	同	五五	一一〇	—	五五
	タビラス	六四	六五〇	二三六	同	二四八	一一〇	—	二四八
	カリホワン	二一	三〇〇	七〇	同	七八	一一八	—	七八
	計	二六七	七〇五	一,八五〇	同	一,九九二	一〇八	—	一,九九二
合計		一〇三六	一三,四六二	三,五四六		三,九七二	一一三	—	三,九七二

福島技手（臺中州理蕃課）

臺中州に於ては警務局の指示に從ひ三坪試驗區、官設苗圃、高砂族栽培園と三段に分けて栽培したる外、昭和十七年度には新高郡下に於て種薯の大小に依る肥大率試驗を實施致したるに、其の成績は別表の通りであるが各試驗成績の概略を述ぶれば左の如くである。

一、三坪肥大率試驗區成績

昭和十七年度の三坪肥大率試驗區設置箇所三八箇所中、肥大率最高は新高郡イシガン駐在所三坪園の二一・五四七倍(植付量五〇六・七瓦、收穫量一〇・九一八〇瓦)で、最低は收穫皆無箇所五箇所(東勢郡下のローブコー、新高郡下の東埔、治莽、バクラス、能高郡下のムカブーブ)で肥大率二倍以上に達したるは二四箇所に及び、肥大率平均を過去三年の實績と比較對照するに昭和十五年は一・八倍、十六年は一・五倍、十七年は三・八倍と云ふ比較的好成績を擧げたのである。

二、官設苗圃成績

官設苗圃設置二一箇所中、肥大率二倍以上に達したる箇所は僅か二箇所(能高郡干卓萬及武界)にして、肥大率平均昭和十六年の一・四五二倍に比し僅か〇・八倍と謂ふ不成績に終りたる原因は、授産擔任者の頻繁なる異動に依り管理不充分なりしためならむと考へらる。

三、高砂族栽培園成績

高砂族栽培園一七箇所中、肥大率二倍以上に達したる箇所は六箇所(望鄉、豐丘、內茅埔、干卓萬、良久社、武界)、肥大率平均一・九六倍にして昭和十六年の一・四倍に對し多少好成績を示したるは高砂族の栽培技術が向上したるものと思料される。

四、種薯の大小に依る肥大率試驗成績

本試驗は新高郡下に於ける玉唉ツヅラフヂ主要産地たる一〇箇所(イシガン、人倫、タマロワン、蕨、內茅埔、豐丘、新鄉、楠子脚萬、望鄉、東埔)に苗圃を設置し、最小七瓦より最大二七・五瓦の種薯を一箇宛秤量の上植付と同時に各株に豫め準備し置きたる一號より三六號迄の立札を立て各株の植付量を明記し、掘取りに際しても一株宛嚴密なる秤量をなしたるに、其の中成績最も優秀なるイシガン駐在所試驗園の成績を示せば、三六株中肥大率最高一〇九・六倍(第十六號

株、植付量八・五瓦、收穫量親芋二五八・五瓦、子芋六七三瓦、計九三一・五瓦）にして、全然收穫無き株三株、平均二四・二倍の好成績を擧げ得たのである。本試驗の成績を檢討するに、小形全形薯の方が一株苑の肥大率大に非ずやと思料される。

五、結　論

以上述べたる成績より綜合的に考へるに、臺中州下の玉峽ツヅラフヂ自生地たる濁水溪兩岸中、上流は霧社を界とし下流は新高郡人倫迄の間に於ては、次の諸點に留意せば概當の好成績を得るに非ずやと思料す。

一、位置選定
　イ、緩傾斜地又は平坦地
　ロ、適當の水分を有し且つ排水良好なる位置
二、土　質
　表土深き腐埴土又は砂質壤土
三、種薯の選定
　一〇瓦內外の小形、全形、新薯、密植
四、植付時期
　十二月——一月
五、管　理
　イ、腐熟せる堆肥の施用（坪二貫位）
　ロ、適度の敷藁
　ハ、支柱の設置
　ニ、五—七月頃迄月一—二回苑の中耕

臺灣省農業試驗所 圖書室 農林動閱

ホ　過乾に失せざる様適度の水分を與へると共に雨期たる四―六月頃の排水

第一表（昭和十七年度三坪試驗區三八箇所中肥大率二倍以上の箇所）

栽培地	標高	土質	平斜別	倍率
	尺			倍
埋伏坪	一、六〇〇	砂質壤土	平坦地	二・〇
雪山坑	一、八〇〇	同	同	五・九
南勢	一、九〇〇	同	同	二・一
裡冷	二、二〇〇	同	同	二・四
望鄉	三、〇〇〇	腐埴土	同	三・七
楠子腳萬	三、二五〇	同	同	二・六
新鄉	三、〇〇〇	同	同	五・〇
內茅埔	一、五七三	同	同	五・三
人倫	一、五〇〇	砂質壤土	同	一二・七
イシガン	三、〇〇〇	埴質壤土	同	二一・五
タマロワン	一、二七三	同	同	一一・一
蕨	二、五〇八	赤粘土	同	五・二
農業講習所	三、七六〇	砂質壤土	同	五・六
過坑	二、四〇〇	同	同	三・二
武界	二、四〇〇	同	同	一三・三
川中島	一、六五〇	同	同	四・六

農業試驗所 1895 NATIONAL AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE

第二表（昭和十七年度官設苗圃一一箇所中肥大率二倍以上の箇所）

栽培地	標高	土質	生育日數	倍率
バイバラ社	一、八〇〇	礫質壤土	同	一四・八
イナゴ	三、〇〇〇	砂質壤土	傾斜地	三・一
トロツク	四、八五〇	同	平坦地	三・〇
千萬卓	二、六〇〇	同	同	三・一
良久社	三、四〇〇	同	同	一四・四
中原	一、七一二	埴土	同	三・二
眉溪	二、五二七	砂質壤土	同	四・〇
霧社	三、七五〇	同	同	三・三

第三表（昭和十七年度高砂族栽培園十七箇所中肥大率二倍以上の箇所）

栽培地	標高	土質	生育日數	倍率
武界	二、四〇〇尺	砂質壤土	三六三日	三・〇倍
千萬卓	二、六〇〇	同	三〇二	四・二

栽培地	標高	土質	生育日數	倍率
望鄉	三、〇〇〇尺	腐埴土	二四〇日	二・〇倍
豐丘	一、八〇〇	砂質壤土	三六八	三・〇

栽培地	標高	土質	生育日數	倍率
內茅埔	一、五七三尺	腐埴土	三六〇日	二・一倍
干卓萬	二、六〇〇	砂質壤土	三〇一	三・六
良久社	三、四〇〇	同	二九四	三・〇
武界	二、四〇〇	同	三三三四	三・〇

第四表（新高郡イシガン駐在所に於ける種薯の大きさに依る試驗成績）

種薯番號	種薯重量	收穫量 親薯	收穫量 子薯	收穫量 計	倍率	摘要
一	一九五瓦	三〇〇瓦	一七二瓦	三七二瓦	一九・一倍	1 標高 三、〇〇〇尺
二	一〇五	一〇六・〇	二八一五	三八六五	三六・九	2 土質 埴質壤土
三	一八五	七三五	四七五	一二一・〇	六五	3 平斜別 平坦地
四	二三五	四〇〇五	四三五	四四三・〇	一八・九	4 植付年月日 一七、二、四日
五	二七五	八一五	一六五	九八・〇	三六	5 收穫年月日 一八、一、二九日
六	一八・〇	一六一五	一一三・〇	二七四五	一五・三	6 生育日數 三六〇日
七	九・〇	九五五	一四・〇	一〇九五	一二・二	7 掘起し後二日間貯藏の種薯を植付けたり
八	一七・〇	一三四五	三五三・〇	四八七五	二八・七	
九	一七・〇	一六〇・〇	一八七・〇	三四七・〇	二〇・四	
一〇	一八五	六三五	三三・〇	二九三五	一五・九	

一一	一九·五	七一·〇	三八四·〇	四五五·〇	二三·三
一二	一四·〇	一九八·〇	四六二·〇	六六〇·〇	四七·一
一三	一九·五	二一〇·〇	三六三·〇	五七三·〇	二九·四
一四	八·二	—	—	—	—
一五	九·二	二三·〇	一九七·〇	二一九·〇	二三·八
一六	八·五	二五八·五	六七三·〇	九三一·五	一〇九·六
一七	二一·〇	一〇九·五	六六四·五	七七四·〇	三六·九
一八	九·〇	二八四·五	五九·五	三四四·〇	三八·二
一九	三三·〇	一五·五	一二〇·〇	一三五·五	六·二
二〇	二〇·〇	二〇〇·〇	二二八·五	四二八·五	二一·四
二一	一六·七	一四一·五	六〇九·五	七五一·〇	四五·〇
二二	一〇·〇	一〇九·五	二四二·五	三五二·〇	三五·二
二三	一〇·五	二五·〇	九五·〇	一二〇·〇	一一·四
二四	一一·五	一四〇·〇	二二八·五	三六八·五	三二·〇
二五	一一·五	—	—	—	—
二六	二〇·〇	一五八·〇	三七六·〇	五三四·〇	二六·七
二七	一一·〇	四一·五	三八·〇	七九·五	七·二
二八	九·〇	二二四·〇	三六五·〇	五九九·〇	六六·六
二九	八·〇	—	—	—	—
三〇	八·五	二三一·五	四七·〇	二七八·五	三二·八

種薯番號	種薯重量	收穫量 親薯	收穫量 子薯	收穫量 計	倍率	摘要
	瓦	瓦	瓦	瓦	倍	
三一一	七〇	一五九・五	四七・〇	二〇六・五	二九・五	
三一二	七二	二〇九・〇	一一二・〇	三二一・〇	四四・八	
三一三	六・五	六〇・〇	六六・〇	一二六・〇	一九・四	
三一四	七〇	二四四・五	二五二・五	四九七・〇	七一・〇	
三一五	九五	一三九・五	一一六・〇	二五五・五	二六・九	
三一六	二五・〇	一五一・〇	二四一・五	三九二・五	一五・七	
計	五〇八・八	四八七・〇	七四六・五	一二三六・五	二四・三	

安井巡査（臺南州理蕃課）

昭和十七年度に於ては三坪園五箇所、官設苗圃五箇所〇甲七、高砂族試作園一甲二、計一甲九、植付量一、五二四瓩に對し收穫量は三、一四七瓩にして平均倍率二、〇四倍となり、比較的中庸の成績を擧げ得たのである。而して州下栽培地五箇所の成績は各年度稍々伯仲し、自然及び技術條件の略、一定せるを物語り、將來の技術練成如何に依り四―五倍率に引上げることも難からざる模樣である。

三神技手（高雄州理蕃課）

昭和十七年度に於ては玉峡ツヅラフヂ試作狀況は別表の通りにして、三坪肥大率試驗區三五箇所、官設苗圃二〇箇所面積一二・三甲、高砂族栽培二〇箇所一一、七五八甲であるが、三坪肥大率試驗區に於ける屏東郡マヌル及び旗山郡トナ社の見

るべきものある以外成績の良好ならざるは甚だ遺憾に存ずる次第である。

然らば高雄州に於て氣象的に、土質的に玉吠ツヅラフヂの栽培が不適であるかと云へば決して左樣には考へて居らぬ。此の不成績の原因としては山地駐在警察官の時局下に於ける止むを得ざる事情の爲に生ずる職員の減員竝に之に依つて生ずる異動の頻繁な事に基因するものであつて、決して試作を等閑に附して放置して居る爲ではないのである。然しながら從來試作の結果玉吠ツヅラフヂの栽培は決して難事ではなく、土地と人とが具合良く行けば五倍、一〇倍の倍率にする事は容易であるとの確信は持つて居るのである。玉吠ツヅラフヂの栽培は可能である事を先づ申上げて置きたいと思ふ。

前年私は自生狀態に近く栽培して成績不良であつた旨申上げたが、之は種薯を切つて植えたのと、餘りにクロタラリアを繁茂せしめ過ぎた爲、腐敗により成績が良くなかつたのであつて、之も土地條件によつては決して悪くないと云ふ事を經驗したのである。之はタカヌワで經驗したのであるが、西面せる傾斜度三〇度位の腐植質の非常に多く、且つ雨水の滲透の非常に良い所で、植付後樹豆を被蔭とし、且つ鬼萱を點々繁茂せしめて置いたのが倍率三・五倍位になり、場所に依つては必ずしも悪くないと思つて居るのである。

尙本年三月紅頭嶼より持參せし紅頭ツヅラフヂを恒春郡ボタン社に於て試作せし結果は別表の通りであるが、大體に於て成績良好であつた。

第一表　三坪肥大率試驗區成績

郡	栽培地	標高	土質	平坦地傾斜地別	植付月日	植付量	採取月日	採取量肥大率 掘取即日秤量	掘取翌日秤量	掘取即日	掘取翌日	腐敗病蟲鳥害等の狀況
					昭年月日	斤	昭年月日	斤	斤	倍	倍	
旗	ナ	一五〇〇尺	砂質土	平坦	一七・三・二	六七〇	一七・二・一九	六、八〇〇	六、四〇〇	一〇・二四	九五六	無
ト		二四〇〇	同	同	一七・三・一〇	七〇〇	一八・二・九	一、〇〇〇	九八〇	一・四三	一・四〇	同
ガ	ニ	二五〇〇	砂礫土	同	一七・三・一五	七一〇	一七・二・一七	六、五五	六、四三	〇・九一	〇・八九	腐敗
山	ビビユウ											

郡	山						旗						屏										東	
栽培地	タカヌワ	マガツン	マスホワル	ラツクス	ラボラン	計	アンバカ	サモハイ	トクブン	コチヤボガン	マヌルダイ	アデル	カウ	サンテイモン	計	カナモデサン								
標高	二六四〇尺	三一〇〇	三六〇〇	三一〇〇	二七〇〇尺		五〇〇	四〇五	三一〇〇	二九九〇	三四〇〇	四一〇〇	五〇〇	二八〇〇	九〇〇	一一五〇								
土質	砂礫土	同	砂質土	砂礫土	砂質土		赤土	同	壌土	埴土	壌土	砂礫平坦	砂質土	粘質土	砂礫平坦	粘質土								
傾斜地別	同	平坦	急傾	傾斜	平坦		同	同	同	同	傾斜	同	同	同	平坦	同								
植付月日	一七・二・五	一七・二・一〇	一七・三・一	一七・三・二	一七・三・五	昭年月日	一七・二・五	一七・三・一五	一七・二・一〇	一七・二・一〇	一七・二・二八	一七・二・一三	一七・二・五	一七・二・一〇	一七・一・四	一七・二・一三								
植付量	一一〇一〇斤	五四〇〇	九〇〇	五〇〇〇	七一〇		八一九	五四〇	五一〇	五四〇	五四〇	三〇〇〇	五四〇	五四〇	五四〇	八六四九								
採取月日	一七・一二・二〇	一八・一・二〇	一七・一二・二五	一七・一二・一五	一七・一二・一〇	昭年月日	一八・一・二五	一八・一・二五	一八・一・二五	一八・一・二五	一八・二・二九	一八・四・二〇	一八・一・二五	一八・一・二五	一八・一・二五	一八・一・一五								
採取量 堀取即日秤量	二七一六六五	八六四	一二八〇	五四三〇	二五〇〇斤		二六五	一四〇	一〇〇	五四〇	一〇〇〇	二四五	一〇〇	五四〇	一〇〇	二五五								
堀取整日秤量	二〇一四〇	八二一	一一八〇	五二九六	二一八〇斤		二五〇	二〇〇	一〇〇	五四〇	一二五〇	二四五	一〇〇	五四〇	九〇〇〇	二五〇								
肥大率 堀取即日	一・九三	一・五二	一・四三	一・〇九	二・四七倍		一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・四一	〇・〇八	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	〇・〇五								
堀取整日	一・八三	一・四〇	一・二六	一・〇六	二・一九倍		一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	二・二一	〇・〇八	一・六七	一・六七	一・〇〇	〇・〇五								
腐敗病虫鳥害等ノ状況							同	同	同	同		腐敗			腐敗	同								

州	地名											
潮州	アマワン	二,九四六	砂礫土	平坦	一七・六・一五	五四〇	一七・一二・一二	—	—	—	—	腐敗
	クワルス	四,〇〇〇	同	同	一七・三・一	八四〇	一七・一二・二四	二,五〇〇	二,三〇〇	二・九八	二・七四	
	カピヤン	二,四〇三	同	傾斜	一七・三・一二	五,五〇〇	一七・一二・一三	七,七五〇	七,二〇〇	一・四一	一・三一	
	アブダン	一,六四〇	同	同	一七・一・三〇	五四〇	一七・一二・二〇	四一五	四〇〇	〇・七七	〇・七四	腐敗
	ソウパウ	二,〇〇〇	同	平坦	一七・五・一三	七二〇	一七・一一・二九	一,〇四四	一,〇〇八	一・四五	一・四〇	
	ワカバ	一,一七〇	同	傾斜	一七・四・二五	五五〇	一七・一二・二〇	三二〇	三〇六	〇・五八	〇・五六	腐敗
	マカザヤ〳〵	二,四〇〇	同	同	一七・五・一五	五五〇	一八・一・五	七五〇	六五〇	一・三六	一・一八	
	下パイワン	二,九三〇	同	平坦	一七・五・二〇	六〇〇	一八・一・二〇	七〇〇	六八〇	一・一七	一・一三	
	ピユマ	三,六〇〇	同	傾斜	一七・五・一〇	七五〇	一八・一・一〇	九五〇	九三〇	一・二七	一・二四	
	ライ社	一,九〇〇	同	平坦	一七・三・二	六〇〇	一八・一二・二四	八五六	八四二	一・四三	一・四〇	
	クナナウ	三,九〇〇	同	傾斜	一七・五・二五	二〇〇	一八・一二・一〇	四〇〇	三八〇	二・〇〇	一・九〇	
	ボンガリ	二,三〇〇	同	平坦	一七・一・二六	二七〇	一八・一・二五	四一〇	四〇〇	一・五二	一・四八	
	計					二,六六〇		一六,〇九五	一五,〇九六	一・三九	一・二九	
恒春	ボタン	七九二	礫質壤土	平坦	一七・三・二五	五四〇	一八・一・二〇	八六四	八六四	〇・六〇	〇・六〇	
	クスクス	九〇〇	粘質砂土	同	一七・一・二五	五四〇	一七・一二・二五	五六〇	五六〇	〇・〇四	〇・〇四	
	シナケ	一,二〇〇	礫質壤土	同	一七・一・二三	五四〇	一七・一二・二〇	八四〇	八四〇	〇・五六	〇・五六	
	石門	二〇〇	礫土	同	一七・一・二〇	五四〇	一八・一・一〇	—	—	—	—	腐敗
	計					二,一六〇						

第二表 官設苗圃收穫

郡	族	栽培地	標高	土質	栽培面積	植付量	植付年月日	掘取年月日	生育日數	收穫高	倍率	病蟲鳥害有無	收穫物處理 苗圃用	收穫物處理 高砂族配付用
			尺		甲	斤	昭年月日	昭年月日	日	斤	倍		斤	斤
屏東	山地	トナ	一五〇〇	砂質壤土	〇·一〇	一〇〇	一七·六·二六	一七·二·二〇	一七〇	二八〇	無	無	八〇	二〇〇
		ハイセン	三五〇〇	同	〇·二〇	三五	一七·六·一四	一八·二·一五	二五三	一八〇	〇·八三	同	無	一八〇
		ミヅホ	三一〇〇	同	〇·五〇	三六〇	一七·六·二八	—	—	—	—	—	—	—
		ガニ	三二〇〇	砂土	〇·八〇	七〇〇	一七·六·二六	一八·二·一五	二四〇	八四〇	一·一〇	同	一〇〇	七四〇
		ビビュウ	二五〇〇	砂質壤土	〇·二〇	一四〇	一七·六·二五	一八·三·三〇	二八七	二二五	〇·九六	腐敗五	一二五	—
		ラボラン	二四〇〇	砂礫土	〇·四〇	二八〇	一七·六·一〇	一八·三·二〇	二八四	二〇〇	〇·七一	腐敗八〇	二〇〇	—
		ラックス	三〇〇〇	同	〇·五〇	三六〇	一七·六·二五	一八·四·一	一九三	三二五	〇·八七	無	三五	—
		マスホワル	三五〇〇	同	〇·二〇	二四〇	一七·六·二〇	一八·三·三〇	二六〇	一六〇	〇·六七	同	一二〇	—
		マガツソン	二六〇〇	砂土	一·〇〇	七〇〇	一七·六·二〇	一八·三·五	二五八	一〇八五	一·五五	同	七〇〇	二八五
		タヤヌワ	二八〇〇	砂礫土	一·五〇	一〇五〇	一七·六·四	一八·二·二五	二六六	一六八〇	一·二〇	同	一六〇	六三〇
		計			五·五〇	四一四五			四八七五		一·一七	腐敗八五	二七四〇	二一一〇
東部	ブダイ	コチヤボガン	二九九〇	粘質壤土	〇·七五	一·三一〇						無	一·三一〇	一·三一〇
		マヌル	三〇〇〇	礫土	〇·七五	四五〇	一七·六·一	一七·九·九	五四六	五四六	一·二一	有	四五〇	九六
		ブダイ	二四〇〇	砂礫土	一·〇〇	二四〇〇	一七·五·二九	一七·五·二〇	三五六	二三四六	一·〇二	無	—	二三四六
		計			二·五〇	四·〇四〇			四·三四	四·三四	一·〇一		一·七四〇	二·五五四
ピュマ			三六〇〇	砂礫土	〇·一〇	一五〇	一七·六·一〇							

潮州												
アマワン	二、九四六	同	〇、一〇	一四四	一六、六、二							
カピヤン	二、四〇四	同	一、四〇	二五〇	一六、六、三七							
クワルス	三、四〇〇	同	一、六〇	七五〇	一六、五、二五							
ラ イ 社	一、九〇〇	同	〇、一〇	七五〇	一六、六、一五	一八、二、六	二三七	八八	一、一七	有		
ボンガリ	二、三〇〇	同	〇、三〇	八九	一六、六、一〇	一八、二、二〇	二五六	一一三	一、三七		一一三	一
クナナウ	三、〇九〇	黒砂土	〇、四〇	一二五	一六、六、一五	一七、二、一〇	一八〇	四	〇、〇三		〇五	三五
計												
合一計			一二、三〇	八、三五八	一、五九三			九四二七	一、一九			

第三表　高砂族收穫狀況

郡	旗											
庄名	マガワン	ガニ	ビビユウ	マスホワル	ラックス	計						
栽培戶數	戶 三〇	二〇	一四	一三	二九	一三三						
面積	甲 一、五〇〇	〇、八〇〇	〇、二〇〇	〇、一〇〇	〇、一〇〇	二、九〇〇						
植付量	斤 一、一〇〇	七三〇	一五〇	七〇	七〇	二、三一〇						
收穫年月日	昭和年月日 一八、三、五	一八、二、一六	一八、四、一	一八、二、二四	一八、四、二							
收穫高	斤 一、六五〇	八六四	一四〇	八六	一三六	二、八七六						
倍率	倍 一、五〇	一、一〇	〇、九三	一、二三	一、八九	一、二五						
處理 賣却用	斤 六五〇	—	—	—	—	六五〇						
處理 種薯用	斤 一、〇〇〇	八六四	一四〇	八六	一三六	二、三六六						

郡	庄名	栽培戸数	面積	植付量	収穫年月日	収穫高	倍率	処理 賣却用	処理 種薯用
		戸	甲	貫	昭和年月日	貫	倍	貫	貫
屏東	コチヤボガン	一〇〇	〇・三〇〇	一八四	一七・九・八	一七六	〇・九五	一〇四	七三
	マヌル	八二	二・一〇〇	一、三五〇	一七・九・八	一、三三七	〇・九八	九三	一、三四
	ブダイ	一四三	二・〇〇〇	一、八四五	一七・九・一〇	一、三五八	〇・六八	六三	六八
	カバラヤン	五三	二・〇〇〇	一、八四五	一七・九・一〇	一、三三六	〇・七二	六一〇	七一六
	計	三七六	六・三〇〇	五、二〇四		四、〇八七	〇・七八	一、四三九	二、六五〇
潮州	アマウン	五四	〇・一〇〇	七三					
	ドブドブス	五〇	〇・〇五〇	三六					
	スルラ	五一	〇・〇五〇	三六					
	クワルス	一〇	一・六〇〇	八〇〇					
	クナウ	一〇	〇・四〇〇	一五〇	一七・一一・一〇				
	ボンガリ	二九	〇・七〇〇	四一					
	下パイルス	一二	〇・三〇〇	三三					
	プソンロク	一〇	〇・〇〇四	一一					
	ライ社	一〇	〇・一〇四	七五	一八・一二・六	八八	一・一六		
	ピユマ	一〇	〇・一五〇	一〇					
	計	二五六	二・五五八	一、二五三		九二			九二
合計		七五四	一一・七五八	八、八六七		七、〇五五	〇・七八	二、〇八九	四、九六八

第四表　紅頭ツヅラフヂ活着率調査

蔓種別	挿木本數	活着本數	枯死本數	活着率	枯死率	生育狀況
老蔓	四四本	四二本	二本	九五·五%	四·五%	五寸ー一尺二寸に伸長せるもの二一本
上蔓	一一〇	一〇一	一九	八四·二	一五·九	五寸ー一尺四寸に伸長せるもの五一本
幼蔓	一二三	七〇	四三	六一·九	三八·一	三寸に伸長せるもの三〇本
計（平均）	二七七	二三三	六四	七六·九	二三·一	

備考　蔓採取月日　昭和十八年三月二十日
植付月日　同　年三月二十五日

佐藤警部（臺東廳理蕃係）

昭和十七年度に於ては三坪園二〇箇所、官設苗圃一甲六九六、高砂族試作園〇甲〇一、計一甲六九九、植付量一、七一四瓲に對し收穫量は三、三七八瓲にして平均倍率一・九七倍であり、總觀すると關山郡パシカウ溪流域、エバコ、網綢方面の山脚地帶及び臺東郡ビララウ、ジョモル、チョカクライ等標高二、五〇〇尺以上の一帶が好適と思料せられる。

本年度の成績を前年及び前々年に比較すると將に飛躍的な進度を示したばかりでなく、今後更に向上の成果を收むることに何等の躊躇もなく且つ滿々たる確信の氣が漲つて居る實情であつて、私は此の實地と取組んで長年月默々として當局の指示に從ひ、そして自らの創意と熱を打込んで得た此の體驗こそ今日急速多量生産の要請に應ゆる絕對の力であると確信するものである。而して此の體驗たるや極めて「平凡なる眞理なり」と云ふことが結論づけられるのであつて、恰も甘藷の增産に乘出すと同樣な意氣込を持つて玉吱ツヅラフヂ增産は皇國農民の義務であり、且つ亦其の栽培は極めて容易なりとする信念を一般に扶植し、所謂大衆的作物觀を强調することが緊要な問題と思ふのである。斯樣な見地から私は玉吱ツ

ヴラフヂの栽培訓として次の様な平凡な事を常に強調して居るのであるが、特に高砂族を對象として玉唉ツヴラフヂの增産を期そうとする理蕃としては、高遠な理論よりも手近かな指針と云ふ事が尊いことを痛感するが故に、理蕃人としての立場から敢て爰に申述べさして頂く次第である。

玉唉栽培訓

一、堆肥と熱肥を打込むこと。

玉唉ツヴラフヂは多量の有機質肥料を求むるが故に、甲當二萬斤の堆肥は絕對の條件であると共に、常に玉唉園を見廻つて病蟲害の有無、濕度の關係等に深い注意と溫かい心を持つて所謂玉唉に對する愛情の熱肥を施すことも亦絕對の要件である。

二、深く耕すこと。

玉唉を存分に伸張せしめる爲には先づ其の生活土を深く耕し起すことが肝要である。玉唉園の經營は先づ縱に廣く而して後、橫に擴めることが信條でなければならない。

三、適當の水分を保持せしむること。

多濕旱魃は共に大敵である故に敷藁、敷草も箇所により考慮を要し一律に論ずべきでない。濕地、乾燥地によつて取捨すべきで要は適當な水分を保持せしむることが肝要である。

四、中耕除草を勵行すること。

一回の中耕は克く一信の肥大率を見る。須らく一箇月一回主義の中耕除草を施すべきである。

五、種薯は小薯全形を選ぶこと。

玉唉の活力は種薯に存すると云つても過言でない。三瓦乃至六瓦程度の小全形薯が肥大伸張力が旺盛で種薯として理想的である。

六、淺植密植すること。

淺植密植は玉唉增産の要件である。卽ち植付深さ一寸五分、株間を五寸程度とし、一畦二條植は多收穫にも且つ亦肥培管理にも好適な標準である。

七、其の他

玉唉の休眠期は床替の時期と心すべきである。卽ち一月から二月末頃迄を廳下に於ける植付の適期とする。此の期を中心として豫め整地施肥の準備を進めることが肝要である。最後に蔓を充分に伸すことは一面根の活力を旺盛にする所以であるから、支柱を施すことを閑却してはならない。

以上の如く私は平凡な訓をもつて信念とするが故に玉唉ツヴラフデ增産は皇國農民の常識であらねばならないことを强調する次第である。

三坪肥大率試驗區成績

栽培地	標高	土質	植付月日	採取月日	肥大率
リト	三、五六〇尺	砂質腐植土	昭一七、一、三〇	昭一八、一、三一	九・七倍
ブルブル	二、九〇四	砂壤土	同	一、二〇	同	一、三一	四・六
エバコ	二、七二〇	腐植土	同	一、二六	同	一、二七	五・五
鈴鹿	一、二八〇	砂壤土	同	一、二九	同	一、三〇	六・〇
大埔	一、〇〇〇	同	同	一、二九	同	一、三〇	三・五
網綢	一、一五五	同	同	一、三〇	同	一、三〇	四・六
楠里	一、〇五二	同	同	一、一九	同	一、二三	四・二
壠山	一、〇五七	同	同	一、一〇	同	一、一二	四・〇

栽培地	標高	土質	植付月日	採取月日	肥大率
パンカウ溪	八五八尺	粘質壤土	昭一七、一二七	昭一八、一、三〇	一一・〇倍
紅葉谷	五九七	礫質壤土	同	同 一、二五	四・六
中野	八〇〇	同	一、一六	同 一、二〇	五・〇
ハイトトワン講習所	八〇〇	砂壤土	同 一、二九	同 一、三〇	五・八
ト、アバル	六〇〇	砂質土	同 一、二〇	同 一、二一	九・二
ビララウ	二、八〇〇	同	二、五	同 一、一九	三・二

根上巡査（花蓮港廳理蕃係）

昭和十七年度に於ける三坪園二七箇所、官設苗圃一四箇所〇甲八二、高砂族試作園〇甲〇四、計〇甲八六、植付量五八八瓩に對し收穫量は一、〇九九瓩にして平均倍率一・八八となり中位の成績であるが、花蓮郡ブスリンの官設苗圃に於ては七・〇倍、鳳林郡チャカンの三坪園肥大率は三八・四〇倍を示し、將來適地本位に技術練成を以て嚮めば豫期以上の成績を望み得ることが出來る。

而して之等適地と認められるは標高四〇〇尺より六〇〇尺の山脚地帶が多く、土質は砂質壤土で栽植法としては堆肥の施用に重點を措く外、追肥として人糞尿を施用した。病害には特記すべきものがないが旱害及び白蟻、蟋蟀の害を受けたるものが多い。

昭和十七年度栽培狀況

倍率	苗圃	三坪試驗區	摘要

五倍以下のもの	箇所 一三	箇所 八	一箇所掘取りを爲さず
五倍以上一〇倍以下のもの	一	一一	
一〇倍以上のもの	一	八	最高三九・六倍

郡別成績

郡別	苗圃別	箇所數	面積	植付量	收量	倍率	摘要
花蓮郡	官設苗圃	七	甲 〇・五〇	斤 二四六	斤 五三五・二〇〇	倍 二一・三	一箇所掘取りを爲さず
鳳林郡	同	二	〇・一〇	六三	一四六・五四〇	二・三六	
玉里郡	同	五	〇・三三	二四〇	一四九・四四〇	〇・六三	旱害に依る減收
計	同	一四	〇・八二	五四八	八二一・一四〇	一・五〇	
花蓮郡	三坪園	一四	坪 四三	七九六〇	五三・一六〇	六・六九	最高
鳳林郡	同	三	九	一六二五	二四七・〇五	一五・二〇	最低
玉里郡	同	一〇	三〇	五七一五	七六・七〇〇	一三・四三	最高
計	同	二七	八一	一五・二〇〇	一五四・五六五	一〇・一〇	最低

最高 一四・二
最低 一一・〇六
最高 三一・九
最低 三一・七
最高 一三・二
最低 一三・二

野田技師（臺南州農會）

本會に於ては昭和十七年度新規事業として結核病の治療竝に豫防に特效ある玉咲ツヅラフヂの合理的栽培增殖の方途を打開し、以て國民保健に寄與せんが爲、本藥草の試作圃二甲歩を當州新營郡關仔嶺及び嘉義郡サビキの兩所に各一甲歩宛

を設置し之が栽培增殖試驗を行つた。其の成績概要は次の如くである。

一、關仔嶺試作圃

標高約六百米、新開墾の南向三〇度斜面に幅約二米の細長き階段畑を設け、地形に應じて適宜に排水溝を設置した。土質は有機質に富む砂質壤土、植床は高さ約一五糎、幅約一二〇糎の平畦となし、植付は株間約三〇糎、條間約六〇糎の二條植とした。種芋は嘉義郡サビキ及び高雄州旗山郡より購入したもので、之を大形（一箇當平均重量健全全形薯一二三八・九瓦罹病切斷薯一九三・九瓦）、中形（一箇當平均重量健全全形薯一〇一・二瓦罹病切斷薯八八・八瓦）及び小形（一個當平均重量健全全形薯三三・一瓦罹病切斷薯三八・八瓦）に三大別し健全なるものは全形の儘、白絹病に侵かされたるものは其の罹病部を切除し、何れも石灰を充分塗附して植付した。其の成績は左表の如くである。

其ノ一

區分	植付種薯數	同上重量	一箇當平均重量	白絹病被害狀況 缺損株數	罹病株數	計	被害率
大形（健全、全形）	七九〇	一八八七〇〇瓦	二三八九瓦	二七〇	三〇七	五七七	七三〇倍
中形（健全、全形）	一、八六一	一八〇五〇〇	一〇一・二	二一九	一五〇	三六九	二八八
小形（健全、全形）	一、九九六	六六、〇〇〇	三三・一	七六四	四五五	一、二一九	六一・一
大形（罹病、切斷）	八二〇	一五九、〇〇〇	一九三・九	三四六	二三三	五七七	七〇・四
中形（罹病、切斷）	一、三三五	一一七、六〇〇	八八・八	三五五	六一〇	九七五	七三・六
小形（罹病、切斷）	一、八五五	七二、〇〇〇	三八・八	一、一三	三八	一、四五〇	七八・三
計（又は平均）	八、〇六七	七三、八〇〇	九一・〇	三、〇八六	二、〇八一	五、一六七	六四・二

其ノ二

區分	收穫量										倍率
	罹病株數	同上重量	一箇當平均	健全株數	同上重量	一箇當平均	當初平均重量ヲ一〇〇トセル場合ノ指數	收穫株總數	同上總重量	一箇當總平均重量	
		瓦	瓦		瓦	瓦			瓦	瓦	倍
大形(健全、全形)	三〇七	七〇・二五五	二三八・九	二一三	八六・一七五	四〇四・五	一六九	五一〇	一五六・四五〇	三〇〇・九	〇・八三
中形(健全、全形)	一五〇	一九・三八八	一二九・三	九一三	一〇一・五一三	一一一・三	一一〇	一〇六三	一二〇・九〇一	一一三・八	〇・九二
小形(健全、全形)	四五五	一五・一八八	三三・四	七七七	三九・七八八	五一・二	一五五	一二三三	五四・九七六	四四・六	〇・八三
大形(罹病、切斷)	二三二	四三・九〇〇	一八五・七	二四三	四五・一五〇	一八五・八	九六	四七四	八八・〇五〇	一八五・八	〇・五五
中形(罹病、切斷)	六一〇	四九・九一三	八一・八	三五〇	三二・六六三	九三・三	一〇五	九六〇	八二・五七六	八六・〇	〇・七〇
小形(罹病、切斷)	三一八	一三・四二五	四〇・九	四〇五	二六・一〇〇	六四・四	一六六	七三三	二九・五二五	五三・九	〇・五五
計(又は平均)	二〇八一	二一一・〇八九	一〇一・四	二九〇〇	三三一・六八九	一一四・三	一二六	四九八一	五四二・四七八	一〇八・九	〇・七四

備考　植付月日　昭和十七年五月二十三日
　　收穫月日　昭和十七年十一月十二日
　　在圃日數　一七三日
　　罹病株重量は罹病部を切取つた健全部のみの重量

右試作に於いて罹病率の最も低きは中形健全全形芋の二八・八%にして、其の他は皆六〇%を超え總平均に於いて六四・一%の罹病率を示したのは雨期中の過濕に依るものである。次に健全株のみに就いて其の平均重量增加率を見ると、大形健全全形薯に於いて最高率を示して第一位を占め、第二位が小形罹病部切斷薯、第三位が小形健全全形薯にして、又大形罹病部切斷薯に於いて收穫後の平均重量が植付時より却つて減少したのは當初の平均重量より大なるものが大部分腐敗消失した爲であると思料せられる。結局本試作に於いて各形共其の重量倍率が一にも達しなかつたのは雨期中に於ける白絹病の被害が甚大であつた爲である。

二、サビキ試作圃

標高五五〇米、西向一五度傾斜の新開墾地、土質は有機質に富む砂質壤土、小形種薯は其の儘、大形種薯は三―四切りとし、其の切斷面に草木灰を塗附して昭和十七年四月十八日に植付したのである。植付株數は一五、九五八株、活着率は良好にして病害尠く現在の生育狀況は順調であるもゝ如くに觀察せられる。

本年度は之が掘取りを行はず二年目に行ふ豫定である。

野田博士（臺中高等農林學校）

前年度に試みた多試驗事項中（本年始めのものも含む）一、二の點に併せて過去數年間に得た體驗と、竝に見聞を基として原料作物を對照とし、多少の意見を申述べて見度いと思ふ。

先づ最初に種子發芽に就いてゞあるが、昨年六月廿日から八月廿日迄の間に雌株約三〇株から、完熟種子一五五八粒を得た。採取期間を十日目毎に區切り之を六回とした。卽ち第一回採種は六月廿日より同月三十日に至る期間とし、以後十日目毎に區切り、最終の第六回目は八月十日に終つてゐる。置床は第一回七月四日に始まり最後は八月二十日に終つたのであるが、斯く採種期間を十日に區切つた譯は月の上、中、下旬に分けて同一株から得らるゝ時期の變化に伴ふ種子數の相違竝に成熟時期と種子充實の關係及び發芽との關係等を知らんとしたのによる。

種子充實度を知らんが爲比重選を行ふことゝし、液の比重を〇・九八とした。豫措としては冷藏處理、溫湯處理とし、液溫と時間の組合せは攝氏三五度一三時間、四〇度二時間、四時間及び六時間とした。結論から申すと、第六回目のものを除いては全部不發芽に終つた。（今日までの處）此の原因は確とは判らぬが、比較液をつくるのにアンモニアを使用したが、これが種子の發芽に惡影響を及ぼしたのではないかと想像される。

第六回目に採種したものは、此の比重選別を行はずに播種したのであるが、これが約六箇月を經た本年二月二十二日頃からボツ〳〵發芽し始め、今日玆に持參した實物で御覽になる樣に相當程度の發芽を見た。其の成績は次の通りである。

處理別	發芽數	發芽率
標準	二二	七〇%
四〇度、二時間	二二	七三%
四〇度、四時間	二一	七〇%
四〇度、六時間	一八	六〇%
三五度、一三時間	一三	四三%

備考　供試粒數は孰れも三〇粒

これによると、此の種類の豫措では三〇度一三時間處理が少し劣つて呈るといふ丈で、豫措の效果は顯著に現はれて居らず、他の方法があることを示唆する樣にも見へるが、一面又種子發芽には相當長期の休眠を必要とすることを物語つて居る。現にこゝに持參した鉢の中でも、四月廿七日に發芽したものもある位である。尤も一昨年實驗したものでは、置床後約一箇月で發芽したものもあるから本植物の種子の發芽期間は相當長期に亘るものであることは事實であり、之に關與する條件に付ては今の處不明である。尙序乍ら露地で種とりを目的として栽培する場合は、雌雄交互か、或は雌二株に對し雄一株位の割合で栽植する必要がある樣である。臺北地方での觀察では、種子の成熟は六月下旬頃から始まり七月上旬が最盛期で八月に入るとずつと衰へ、充實度も大體之と一致するが八月に入つて採種したものは充實が宜しかつた。尤も之は昨年一回丈の成績を基にしたものである。卽ち

回	採種月日	種子數	比重選					
			沈下種子	同上%	浮上種子	同上%
一	自六月二十日 至六月三十日	二七二	一二六	四六	一四六	五四
二	自七月一日 至七月十日	四二五	二二〇	五二	二〇五	四八

回	採種月日	種子數	比重選				
			沈下種子	同上%	浮上種子	同上%
三	自七月十一日至七月二十日	二三四	三〇	一三	二〇四	八七
四	自七月二十一日至七月三十一日	二五六	八四	三三	一七二	六七
五	自八月一日至八月十日	一九一	七八	四一	一一三	五九
六	自八月十一日至八月二十日	一八〇	—	—	—	—

次に實生苗の成育狀況に就いて述べると、昭和十六年度採種せるものに發芽處理を行ひ莖長約八糎位に伸長せるものを十七年三月廿七日に移植し、同年十二月二日に收穫せる九八株の生薯重量は最少二瓦から最大四四瓦に及んだのであるが、一株平均重量は一六・九八(±〇・六八瓦、標準編差は一〇・〇一(±〇・四八瓦で、此の成績から見ると實生苗は栽培期間八箇月半で一株重量六・九七瓦から二六・九九瓦の間に彷徨することが判つた。栽培地の土壤は粘土三八、微砂二八、細砂四六、粗砂八、腐植一九、(孰れも小數點以下切捨)PH六・二で、肥料は北部地方に於ける甘藷に對する標準施肥量によつた。

次に玉唉栽培の實際に就いてゞあるが、今迄の體驗から言ふと、これは極めて集約な栽培を必要とするものであつて、蔬菜同樣或はそれ以上手を掛けなければ充分の成功は期し難いといふことである。

環境要素中氣候と土壤とが大切であるが、中でも土壤が主要件をなすものと見てゐる。之を企業的見地から見れば勞力と交通の便あることを必要とする。

次に玉唉か紅頭かといふ問題だが、之は中々大きな問題で且つ政策的な事柄も含んで居る樣で、輕々しく論議することは出來ない。且つ私の主義としで、孰れが優り孰れが劣るといふ樣な批評めいた言辭は一切避け度い。孰れも成功するこ

とを哀心より祈つて居る一人である。

たゞ此の方面に關心を持つ一學徒として考への一端を申述べると、紅頭栽培には相當多額の栽培費を要することで、支柱をどうするかといふ問題と、栽培技術からいふと灌水である。栽培費に就いて私が一寸瀨踏した處では、玉唉栽培に比し二倍半から三倍位かゝりはしないかと考へてゐる。尤も支柱が竹以外といふことになれば問題は又違つて來るが。又玉唉と比較した場合所含有效成分量と其の藥效の問題がありはしないか。素人目には地上部の旺盛な繁茂振りを見て紅頭に限るといふ樣に見る人があるかも知れぬが、見掛けの收量丈で軍配はあげられぬ。

一方玉唉の方では成る可く早く個體數を增す方法を講ずる事と、病害中特に白絹病の防除に成功する事が急務と信ずる。最後短期間に個體數をなるべく急速に增す方法としては、種子繁殖によるを最良とするも豫措に就いては尙今後幾多研究を要する。そこで私は種薯を可及的細斷して之にホルモン處理を施すこと、つまり大きさから言つても種子に準ずるもの卽ち準種子によつて個體數を增すことを今年始めて試みた。

但し之は大薯からも小薯からも結果する處の肥大倍率が同じだとすれば、計算上收得量に於ては差なしといふことになるが、栽培上危險度の分散といふことになり、此の方法を每年繰り返すことにより個體數を增すといふ點からすれば確かに有效な方法と考へてゐる。

細片一箇の重量を二乃至三瓦としホルモン處理を施して今年始めて試みたが、發芽は中々良好である。今年の秋になつて見ないと肥大率は判らぬが、今迄言はれて居た樣に何も種薯として二〇瓦から五〇瓦程度のものを標準とせずとも、其の一〇分ノ一乃至二〇分ノ一程度の大きさで此の目的には結構間に合ひはしないか。此の薯の大きさと收得量との間に於ける相關々係は研究の價値があると思はれる。

但しこの方法は山出しの薯では不向きで、一度栽培したものでなくてはいかぬ。本年試みた方法中薯全形のまゝホルモン劑にひたしたのと、細斷して處理したのとでは孰れの處理區でも前者の方が發芽が迅速で且つ整一であつた。特にナフタリン醋酸で處理したものに其の傾向が著しかつた。斯く種薯を細斷して繁殖用とする思ひ付は未だ何處でも見聞してな

い。

とすれば其のプライオリテーは余及び小早川に期して貰ひ度く、その最もよい細斷の方法は、今後皆様方によつても研究して頂き度い。參考の爲私方で使用してゐるホルモン劑の種類を申述べると、ナフタリン醋酸、發根素、ヘテロオキシンの三種類で、消毒劑としてはメルクロン及び過マンガン酸加里を用ひホルモン劑との併用をも試みた。(附記來年度は多少の肉を附した芽掻の方法も試み様と期してゐる)

本法に依る時は苗床下に周到なる管理を必要とし、發芽したものから順次本圃に移植する。

繁殖用だから密植差支へなかるべく、今年私方でやつてゐるのは畦幅四尺に三條植ゑとし、株間二〇糎としてゐる。

尙生産費の問題、これを出來る丈正確に調査すること。生薯買取りの方法及び全島に亘り。野生薯がどれ丈あるかといふことの見透しと一度掘取つた後、どの位年數が經てば大體に於て又元通り收穫があがるかといふことの調査は出來る丈早く取かゝる必要があると痛感する次第である。

尙亦環境利用による栽培法の確立も、もとをと言へば植物生態調査が先にならなければならぬから、此の方面の專攻學者の協同研究の必要を感ずるものである。

福田助教授（東京帝國大學臺灣演習林）

本試驗は昭和十四年四月より開始し昭和十九年三月を以て一應終了の豫定であつて、玉峧ツヅラフヂの自生地に於ける粗放なる栽培方法と各種造林地内の間作によりて、幾何の增收を期し得べきかを目的に試驗して居るものであつて、目下その一部の成績は取纏め中にて近く演習林報告に發表の豫定である故、茲には簡單に之が主なるものに付き概略の說明をしたいと思ふ。目下施行中の試驗は次の二種である。

(1) 和社第一號試驗(生長量調査試驗)　昭和十四年三月設定

(2) 和社第二號試驗(施肥試驗)　昭和十四年六月設定

(3) 和社第三號試驗(播種試驗)　昭和十四年九月設定
(4) 玉埃臺第一號試驗(植付距離試驗)　昭和十四年六月設定
(5) 玉埃臺第二號試驗(綠肥試驗)　昭和十六年九月再設定
(6) 玉埃臺第三號試驗(鬼茅試驗)　昭和十五年一月設定
(7) 玉埃臺第四號試驗(平畦試驗)　昭和十五年三月設定
(8) 玉埃臺第五號試驗(茅原試驗)　昭和十五年三月設定
(9) 一圓向第一號試驗(廣葉杉造林地內間作試驗)　昭和十五年八月設定
(10) 內茅埔第一號試驗(芭蕉畑內間作試驗)　昭和十六年一月設定
(11) 內茅埔第二號試驗(琉球松造林地內間作試驗)　昭和十六年一月設定
(12) 內茅埔第三號試驗(相思樹造林地內間作試驗)　昭和十六年一月設定

以上面積二一、五二〇平方米に達し、尙此の他に一般栽培地面積は三二、九五〇平方米である。

一、生長量試驗

玉埃ツヅラフデ塊根の定期生長期、生長量竝に之が發芽、開花、結實、落葉の時期等に關する調査を爲し、栽培の資料に供せんとするもので次の五區に分つ。

A區　子薯及び分根を取除きたる全形塊根の植付
B區　八切又は六切せる塊根の植付
C區　輪切せる塊根の植付
D區　子薯及び分根又之を輪切せるもの、植付
E區　根莖(假稱塊根の頸部を切り離なせるもの)及び寸斷せる根莖の植付

尙上記の各區は更に八分區に分ち三箇月、六箇月、九箇月、一箇年、一箇年半、二箇年、二箇年半、三箇年に調査することゝした。現在迄判明せる結果を綜合し生長率を示せば次の如くである。

繁殖法区分	三箇月	六箇月	九箇月	一箇年	一箇年半	二箇年	二箇年半	三箇年
A区	四五九 %	六九二 %	五六七 %	五四六 %	一一五 %	二七四 %	二四九 %	四七〇 %
B区	(一) 二五〇	四五〇	五一六	一七四七	二〇三	三六六	一三八	三五九〇
C区	四三四	一七三六 (一)	一七	四二三	八七一	二五七	五八四	三九七
D区	(一) 二五一	三〇一九	二八五九	四七五五	四二九七	四六四	一、七五八	一、二三三
E区	二五九二	三六六六	三九二七	四三〇一	五二九三	八五七七	一、三四七六	九七九一
計	三一六	二〇七	一〇七九	二七六	二七九一	二〇二三	二七六	一九二九
備考	一七箇腐敗	一五箇腐敗	一八箇腐敗	二〇箇腐敗	一五箇腐敗	二四箇腐敗	二三箇腐敗	一六箇腐敗

以上より考察すればE區最も成績良好であつてD區及びC區之に次ぐ結果となつた。又栽培期間として一箇年乃至一箇年半を有利とするも、之より長きは寧しろ負生長を示すものが多く有利でない樣に考へられる。又薯の生長は三月、七月が最も盛で七月—九月は一時止り、生長量は寧ろ負を示し更に九月—十二月は僅か乍ら生長し十二月—三月は再び生長量負となる。之は當期間が乾燥期に當つて薯が萎縮するためと思はれる。卽ち年二回の生長期があるが第一回の生長期に於ける生長量特に大であり、且つこのことは出芽期及び落葉等の期間と相關聯するものと考へられることである。

種薯の大きさと生長量の關係を見ると種薯の大きさ一瓦、一二五瓦は大體同じ程度の生長量であらう。更に大なるに從ひ生長量減少する傾向がある。又生長率は種薯の小なる卽ち一瓦—二五瓦では二二九・八%、二六瓦—五〇瓦では九四・九%、八一瓦—七五瓦では四五・〇%、七六瓦—一〇〇瓦では三六%の生長をなして居る。從つて實際栽培に當つては小なる種芋を用ふるのが得策かと思料せられる。

次に參考の爲最大生長率のものを示す。

區分	三箇月	六箇月	九箇月	一箇年	一箇年半	二箇年	二箇年半	三箇年
A區	二四六六・七 %	一〇三三・三 %	六三七・二 %	六一・五 %	二六〇〇・〇 %	二六〇〇・〇 %	四〇〇・〇 %	八一三・〇 %
B區	一八一・二	三五五	二八七・三	八六・〇	一、三五・〇	九八六・三	七五七・一	一〇三三・八
C區	四三五・四	六二四・七	一九三・三	一五六・七	二三〇・〇	三三六・七	七、九四七・四	一〇二九・〇
D區	五六四・三	一七七一・四	四八〇・〇	一、九四二・八	三六〇・〇	六五八・〇	六二三・〇	一〇四〇・〇
E區	一〇〇・〇	三五五・〇	六六・〇	二八七・〇	二六一四・三	四五〇・〇	一五、九〇〇・〇	二二三〇七・七

栽培方法の如何によつては多量の收穫を期待し得ることが暗示さるゝのである。

次に塊根と子薯及び分根の生長率を示すと次表の如くである。

區分	總生長率	塊根生長重	子薯及び分根生長率
A區	五四・六 %	二五・一 %	二九・五 %
B區	一七四・七	七八・一	九六・六
C區	四一二・二	一三四・二	一七八・〇
D區	四七四・五	一八一・六	二九二・九
E區	四三二・五	一八九・五	二四三・〇

註　資料は一箇年栽培のものを用ひた。

C區を除き子薯及び分根がより生長大であり、特にD及びE區に於ては此の傾顯著なることが認められるのである。

二、施肥試驗

三要素試驗を行つたのであるが、金肥の入手難で唯一回の試驗を行つたに過ぎないので何等推定し得ぬが、强ひて云へば燐酸區、加里區の一要素は他の區に比して明かに生長量劣つて居る。窒素は概して效果あるべきはアルカロイドとして至當のことであらう。

三、播種試驗

昭和十四年七月より十月に亘り隔日又は連日赤熟せるものを取播とした。播種九〇〇粒、發芽期間九月十七日より十月十日迄、發芽日數六〇日內外、發芽數四〇本、翌年更に發芽し之が發芽率は二三%に達した。之が生長量を調査するに一年二箇月で一・三瓦乃至一〇・一瓦に達し、生長率も四、九五〇・〇%となれるものあるが六〇%は腐朽消失した。播種により增殖は相當困難を樣に思はれる。

四、植付距離試驗

A區を床間〇・九米とし植付距離は二〇糎、二五糎、三〇糎、三五糎、四〇糎とした。
B區は床幅一・八米とし植付距離を二〇糎、二五糎、三〇糎、三五糎、四〇糎とし尙、各區は更に一年目、二年目、三年目、四年目毎に調査した。
次に第一回の調査(植付後一年五箇月)成績を記す。

植付距離	A區			B區		
	一列植			二列植		
	生長率	陌當增收量		生長率	陌當增收量	
二〇糎	一五七・七%	七〇・〇九八	貫	一七三・六%	七七・一五四	貫
二五糎	二〇六・三	七三・四五〇		二〇九・一	七四・三四五	

三〇糎		二〇三・三	六〇・一四九	一七〇・四	五〇・四三八
三五糎		二三〇・三	四九・八八八	一八六・五	四七・一八六
四〇糎		二四五・四	五五・〇八五	一三六・六	三〇・三五三
計平均		二〇五・三	—	一七六・四	—

概して植付距離大なる程生長率良好であるが陌當り換算は小なる程大となつてゐる。A區、B區の比較は未だ判然ならず。尚地形等にも左右されることが多く今後の調査に俟つべき所が多い。

五、鬼茅試験

玉唉ツヴラフヂの自生地が主として鬼茅地なることより鬼茅の影響につき調査せんとしたのであるが、現在迄の結果に於ては寧ろ鬼茅は負の成績を示してゐる。即ち試験地は幅員一米の鬼茅を一米、二米、三米、四米間毎に殘し、その間に株間三〇糎に植付け被蔭の度に變化をあたへた。

第一回調査

鬼茅の列間距離		生長量	生長率	備考
一	米	三〇三瓦	四・一%	五箇腐敗消失
二	米	五四八	一〇・一	一四箇腐敗消失
四	米	五一	〇・五	一四六箇腐敗消失
計		一、二四七	四・一	二二八箇腐敗消失

殆んど生長に到らず腐敗消失するもの多きためであつて、鬼茅のために陽光充分ならざることが原因するならんと思は

れる。

卽ち陽光の充分なる前記植付距離試驗結果と比較するに、生長量に格段の差がある。以上の外、平畦試驗、茅原試驗竝に各種間作試驗等を施行中であるが何れも負の成績を示して居り、茲に何等推論し得ないことを遺憾とする。

山田技師（林業試驗所）

塊根在圃期間と其の肥大率

一、苗圃に玉唉ツヅラフヂの塊根を栽培し、之が肥大率に關し昭和十三年以來滿五箇年間に亘り實行した試驗成績の要約左の如くである。

在圃期間	肥大率（倍）
一箇年目	二・三六
二箇年目	二・〇四
三箇年目	二・八九
四箇年目	一・三一
五箇年目	一・二九

但し塊根中個々のものについては種薯に對し七乃至八倍の肥大率を示したものもある。且つ又全體としても各年度の收穫量は種薯以下に減ずる事はないが、四年目以後の肥大率は夫れ以前のものに比べ著しく減少するから、塊根の在圃期間は三年以上に延引させないのが得策である。又形態の少なる塊根と大なる塊根との肥大率の關係は小なるものが肥大比率が大である。

二、種子を播種して育成した塊根を苗圃に栽培し、昭和十六年乃至十八年の二箇年に亘り塊根の肥大率に關し試驗した成績の摘要は左の如くである。

在圃期間	肥大率
一箇年目	一〇・三二倍
二箇年目	九・三七

但し個々の塊根については肥大率五六乃至八七倍に達したものがあるが、總體としては右表の如き肥大率を示した。卽ち普通塊根を使用した無性繁殖に比べ肥大率は著しく大であるが、元來實生に依つて育成した塊根の一箇當りの絕體重量は〇・一乃至四・〇瓦内外といふ如き甚だ小なるものであるから、肥大率が大である點のみを以て實生に依る有性繁殖が有利であるとは言ひ得ない。

三、林地栽培試驗　雨季、乾季の差最も顯著である恒春龜仔角の林地に於て林間作物として最も粗放なる取扱をなし、塊根の增減に關し試驗した成績を摘記すれば左の如くである。

甲、昭和十六年八月二十八日比較的多濕なる林地を選び塊根一五八箇を栽培したが、發芽後忽ち悉くが食用蝸牛の喰害を被り地上部分の片影だに遺さないやうになつた。其の後八三箇は萠芽し、結局五二・五三%の活着率を示し、一年五箇月を經て收穫量を調査したが種薯に對し六六・八三%を確保する事が出來た。

乙、右甲區のものが蝸牛喰害を受けたので、更めて蝸牛の發生しない林地を選び昭和十六年十一月十九日塊根一四四箇を栽培し、一年二箇月を經て收穫量を調査せるに僅かに種薯に對し一・〇八倍の肥大率を示したに過ぎない。但し個々の塊根としては肥大率三・九倍に達したものもある。

四、紅頭ツヅラフヂ繁殖試驗　昭和十七年五月八日臺東から到着した蔓莖の直徑〇・四乃至一・二糎のものを長さ六乃至一八糎（二乃至三節に切斷し下端を二刀切とし之を苗床に縱に挿植した。其の結果は平均五三・六〇%の活着率を見た。挿穗の大小と活着との間の關係は直徑〇・六乃至〇・八糎のものが最も活着良く、又挿穗の老幼と活着との關係は靑綠色を呈する部分は木質化せる部分に比べ活着が良好である。

以上、臺北たると恒春たるとを問はず、又玉唉ツヴラフヂたると紅頭ツヴラフヂとを問はず何れも林地作物として粗放なる栽培に依るを立前とし、從つて苗圃には特に堆肥等を施肥しなかつたものである。

花田延平（化研生藥株式會社）

玉唉ツヴラフヂと紅頭ツヴラフヂの分布に就いて

私は玉唉ツヴラフヂと紅頭ツヴラフヂの分布に就いて少し話させていたゞきたい。玉唉ツヴラフヂの原産地は、御承知の通り臺灣と支那である。支那では揚子江の北には無く、寧波、坑州、九江、宜昌が北の境で、北緯二二度で止つて居る。南は廣東省迄あるが、海南島には見出されて居ない。東は浙江省、臺灣の臺北州が境で、琉球には分布されて居ない。西の境は貴州省、廣西省で高原でたち切られて居る。支那の産地たる浙江、福建、廣東、江西、貴州の全面積は、約一億二千萬甲歩で、三六〇甲歩の臺灣の三四倍である。臺灣よりは不生育地が多い樣である冒險的見積りではあるが、かりに六割位の野生とすれば支那の玉唉は臺灣の玉唉の二〇倍位あることゝなる。

臺灣では北は最北端の富貴角の波打際にもあるが、南端の鵝鑾鼻には一本も見つからない。恒春郡には玉唉に似たカンボウイはあるが玉唉の野生は無く、亦植付けても北方の樣によく生育しない。潮洲郡役所の渡邊さんに調べていたゞいた結果によると、臺灣の玉唉野生南限は潮洲郡の牡丹路社（北緯二二度一五分）である最適地の一つである臺中州和社の年平均氣溫は二一・〇度で、盛んに發芽し始むる三月が一八・九度で、蔓の發育量の最も多い四月が一九・五度で、開花期五月が二三・〇度、熟實期七月が二四・二度で、種子發芽を中止する十二月が一六・二度である。これで大體どの位の溫度が適當であるかは知られるが、年平均溫度から云へば、臺灣では普通一六度から二二度の茅原又は林投林に分布し、一九度、二〇度、二一度は最適と考へられる。二三度より高溫は恒春、高雄、臺東、臺南地方の平地は不適で、少し冷涼な氣候がよい樣である。臺灣の中部に於ては海拔三百米より九百米位の高地が適地である。

臺灣に於ける野生地の高さの高極は、福山伯明教授の踏査に依れば新竹州竹東郡タイヤカン社の二千米の地點で、降雪のある地帶迄に達して居る。新竹の平均氣溫は二二・〇度であるから、これから計算すると一二度低い一〇・〇度となる。生育期間の溫度はこれよりずつと高い理であるが、隨分寒い地帶迄野生して居る。

次に雨量が年千五百ミリ以下の地帶には野生して居ないから、これより以上の年雨量の地帶がよく、適地和社は二、三四三ミリ、クワルスは五、二八一ミリ、又臺北州の暖々は年五、一一〇ミリ、竹子湖は五、七一二ミリで、よく發育して居るから雨はかなり多量がよい樣である。

潮風のあたる海岸にもあるから風に對する抵抗力は強い樣である。

地質は砂質壤土がよく、腐植質と排水のよい水質に富んで居ることが必要で、强粘土で、乾燥する處には野生して居ない。

高地では庇蔭は無くて差支へないが、低地では適度の庇蔭がある方が發育が良好である。

大體に於てタマザキツヅラフヂは茶の地帶の作物で、サトウキビのよく出來る處には適しない作物である。

紅頭ツヅラフヂは今確實に知られて居るのは紅頭嶼と火燒島とだけである。前に御話があつた樣に山本由松博士のマニラ腊葉館調査の結果に依れば、紅頭嶼の南に在るバタン列島にも採集された標本があるので、至急に實地踏査して開發の道を開くことが必要であるが、とにかく臺灣の本島には入り込んで居ない樣で、所謂新ワーレス線に依つて區劃されて居る。これは臺灣本島の暖い地方では月一〇〇ミリ以下の乾燥期の無い處が殆ど無い爲である。

紅頭嶼は年平均氣溫が二六・一度で、最高月が二九・六、最低月が二一・三度、低極溫が一三・〇度、火燒島は年平均氣溫が二五・二度、最高月が二九・四度、最低月が二〇・〇度である。開花期三、四、五月の氣溫は二一度乃至二八度で、熟實期七、八月は二九度である。臺北では十二、一、二月は發育が停止するから、氣溫の上からは最低月が一七度以上であることが必要である。

紅頭ツヅラフヂには雨量が充分にあることは非常に大切な條件で、强い乾燥期に入る處には野生して居ない。月一〇〇

ミリ以下になる月が無いことである。

紅頭嶼及び火燒島の森林の中にはどこにも最も普通に見る蔓であるが、海岩の砂地の森林には野生して居ない。又茅原にはなく森林の植物で適度の庇蔭が必要である。火燒島には三萬瓩、紅頭嶼には二七萬瓩、計三〇萬瓩の蓄積がある。此の率から推察しても比島にはかなりのセファランチンがある理である。

要するに紅頭ツヅラフヂは熱帶多雨林の植物である。サトウキビの適せない地帶の作物である。然し玉唉ツヅラフヂと反對により暖い氣溫を要求する。これから考へるとボルネオに紅頭ツヅラフヂの適地がある樣に考へられるのである。

窪田稔（化研生藥株式會社高雄農場）

一、毎月植生育調査試驗

當農場獨自の玉唉植付適期と其の生育の周期を確認せんがため、昭和十六年七月より開始し目下繼續中（一部既報—試作第三回座談會要錄參照）の本試驗の成績は左の如くである。

第一表　毎月植試驗區收量調査表

植付月日	種薯種別	植付株數	收穫株數	減株數	減株率	植付量	收穫量	總植付量に對する增減率	殘存株數の植付に對する收量增減率	植付一株の平均重量	殘存株の總植付量
收穫月日											
		瓦	株	株	%	瓩	瓩	%	%	瓦	瓩
一六・七・四	二〇	二〇〇	一二八	八二	四一・〇	四・〇〇〇	四・八五〇	＋ 二二・二	＋ 一〇五・五	二〇・〇〇〇	二・三六〇
一七・一・五	一〇以下	七三〇	五四七	一七三	二四・〇	四・〇〇〇	五・六八〇	＋ 四二・〇	＋ 八六・九	五五・五五	三・〇三八
計		九三〇	六六五	二五五	二七・七	八・〇〇〇	一〇五三〇	＋ 三二・六	＋ 九五・三	八六・九五	五・三九八
一六・七・四	二〇	二〇六	二一六	九〇	四三・七	四・〇〇〇	四・八六〇	＋ 二二・五	＋ 一二五・八	一九・四一七	二・二五二

一七・七・二	一〇	七八六	五六一	二二五	二八・六	四・〇〇〇	八・八九〇	+一三三・二	+二一・九	五・〇八一	二・八五〇
計		九九二	六七七	三一五	三一・七	八・〇〇〇	一三・七五〇	+七一・八	+一六九・三	八・〇六八	五・一〇三
一六・八・九	二〇	二〇〇	一五五	四五	二二・五	四・〇〇〇	五・〇四〇	+二六・〇	+六三・五	二〇・〇〇〇	三・一〇〇
一七・二・九	一〇	五二六	三五三	一七三	三二・八	四・〇〇〇	九・四一〇	+一三五・二	+二五〇・六	七・六〇四	二・六八四
計		七二六	五〇八	二一八	三〇・〇	八・〇〇〇	一四・四五〇	+八〇・六	+一五八・一	一一・〇一九	五・七八四
一六・八・九	二〇	一九九	一七六	二三	一一・五	三・九九〇	一〇・八二〇	+一七一・一	+二〇七・三	二〇・〇〇〇	三・五二〇
一七・八・一	一〇	五二九	三五五	一七四	三二・九	四・〇〇〇	七・三一〇	+八二・七	+一七二・二	七・五六一	二・六八四
計		七二八	五三一	一九七	二七・〇	七・九九〇	一八・一三〇	+一二六・九	+一九二・二	一〇・八五一	六・二〇四
一六・九・七	二〇	二〇〇	一八六	一四	七・〇	四・〇〇〇	七・三五〇	+八三・七	+九七・五	二〇・〇〇〇	三・七二〇
一七・三・四	一〇	六三四	五四七	八七	一三・七	四・〇〇〇	九・一四〇	+一二八・五	+一六四・八	六・三〇九	三・四五一
計		八三四	七三三	一〇一	一二・一	八・〇〇〇	一六・四九〇	+一〇六・一	+一三四・五	九・五九二	七・一七一
一六・九・七	二〇	二〇〇	一七四	二六	一三・〇	四・〇〇〇	一〇・二四〇	+一五六・〇	+一九四・二	二〇・〇〇〇	三・四八〇
一七・九・二	一〇	六三五	五三一	一〇四	一六・五	四・〇〇〇	一三・五九〇	+二三九・七	+三〇六・二	六・三〇〇	三・三四五
計		八三五	七〇五	一三〇	一五・四	八・〇〇〇	二三・八三〇	+一九七・八	+二四九・〇	九・五八〇	六・八二五
一六・一〇・二	二〇	二〇〇	一九三	七	三・五	四・〇〇〇	七・〇六〇	+七六・五	+八二・九	二〇・〇〇〇	三・八六〇
一七・四・一	一〇	六六八	五九三	七五	一一・二	四・〇〇〇	九・三四〇	+一三三・五	+一六三・〇	五・九八八	三・五五一
計		八六八	七八六	八二	九・四	八・〇〇〇	一六・三八〇	+一〇四・七	+一二一・三	九・二二六	七・四一一

植付月日 / 收穫月日	種薯種別	植付株數	收穫株數	減株數	減株率	植付量	收穫量	總植付量ニ對スル增減率	殘存株數ノ植付ニ對スル收量增減率	植付一株ノ平均重量	殘存株ノ總植付量
		株	株	株	%	斤	斤	%	%	瓦	斤
一六・一〇・二	一〇	二〇〇	一九三	七	三・五	四・〇〇〇	九・二四〇	+ 一三一・〇	+ 一三九・三	二〇・〇〇〇	三・八六〇
一七・一〇・七	一〇	二〇〇	四三三	二三五	三五・二	四・〇〇〇	一六・三三〇	+ 三〇八・二	+ 五三〇・〇	五・九八八	二・五九二
計		八八八	六二六	二四二	二七・八	八・〇〇〇	二五・五七〇	+ 二二九・六	+ 二九五・七	九・二二六	六・四六二
一六・一一・二	一〇	二〇〇	一六四	三六	一八・〇	四・〇〇〇	四・〇〇〇	〇	+ 一八・〇	二〇・〇〇〇	三・二八〇
一七・五・七	一〇	四六〇	三八二	七八	一七・三	四・〇〇〇	八・三〇〇	+ 一〇七・五	+ 一四九・七	八・七〇〇	三・三三二
計		六六〇	五四六	一一四	一七・二	八・〇〇〇	一二・三〇〇	+ 五三・七	+ 八六・二	一二・一二二	六・六〇三
一六・一一・二	一〇	二〇〇	一〇〇	〇	〇	四・〇〇〇	八・九〇〇	+ 一二二・五	+ 一二二・五	二〇・〇〇〇	四・〇〇〇
一七・一一・三	一〇	四六〇	三一六	一三四	二九・一	四・〇〇〇	一五・〇五〇	+ 二七六・二	+ 四三一・八	五・九八九五	二・八二四
計		六六〇	五二六	一三四	二〇・三	八・〇〇〇	二三・九五〇	+ 一九九・三	+ 二五〇・九	一二・一一一	六・八二四
一六・一一・二	一〇	二〇〇	一〇〇	〇	〇	四・〇〇〇	四・〇〇〇	〇	+ 一八・〇	二〇・〇〇〇	三・二八〇
一七・五・七	一〇	四六〇	三八二	七八	一七・三	四・〇〇〇	八・三〇〇	+ 一〇七・五	+ 一四九・七	八・七〇〇	三・三三二
計		六六〇	五四六	一一四	一七・二	八・〇〇〇	一二・三〇〇	+ 五三・七	+ 八六・二	一二・一二二	六・六〇三
一六・一一・二	一〇	二〇〇	一〇〇	〇	〇	四・〇〇〇	八・九〇〇	+ 一二二・五	+ 一二二・五	二〇・〇〇〇	四・〇〇〇
一七・一一・三	一〇	四六〇	三一六	一三四	二九・一	四・〇〇〇	一五・〇五〇	+ 二七六・二	+ 四三一・八	五・九八九五	二・八二四
計		六六〇	五二六	一三四	二〇・三	八・〇〇〇	二三・九五〇	+ 一九九・三	+ 二五〇・九	一二・一一一	六・八二四
一六・一二・二	一〇	二〇〇	一八三	一七	八・五	四・〇〇〇	四・六八〇	+ 一七・〇	+ 二七・六	二〇・〇〇〇	三・四〇〇
一七・六・二	一〇	四三五	四一八	一七	三・九	四・〇〇〇	九・三〇〇	+ 一三二・五	+ 一四一・九	九・二九五	三・八四一
計		六三五	六〇一	三四	五・三	八・〇〇〇	一三・九八〇	+ 七四・七	+ 八五・〇	一二・九九〇	七・五〇四
一六・一二・二	一〇	二〇〇	一七〇	三〇	一五・〇	四・〇〇〇	九・一〇〇	+ 一二七・五	+ 一六七・六	二〇・〇〇〇	三・四〇〇
一七・二・七	一〇	四三五	三一八	一一七	二六・八	四・〇〇〇	一四・八〇〇	+ 二七〇・〇	+ 四〇六・一	九・一九五	二・九二四
計		六三五	四八八	一四七	二三・一	八・〇〇〇	二三・九〇〇	+ 一九八・七	+ 二七九・九	一二・五九八	六・三二四

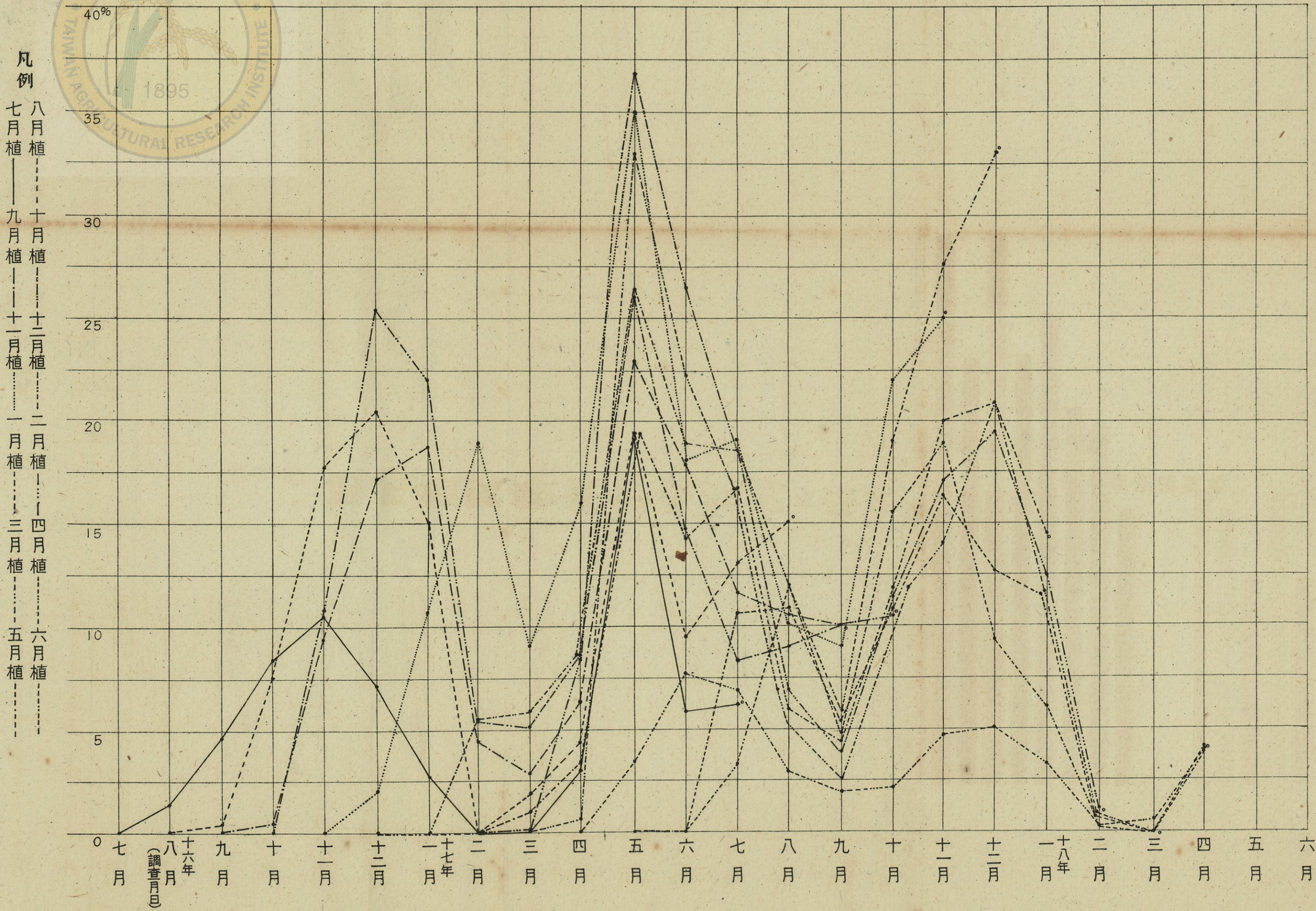
一七・一・六	二〇	六一	五六	五	八・二	二・〇〇〇	一四・四八〇	＋七四・〇	＋八九・五	三・七八六	一・八三六
一七・七・二一	一〇	七七四	六五〇	一二四	一六・〇	六・〇〇〇	一八・六四〇	＋二一〇・六	＋二六九・九	七・七五一	五・〇三八
計		八三五	七〇六	一二九	一五・四	八・〇〇〇	三三・一二〇	＋一四二・三	＋二三一・八	九・五八〇	六・八七四
一七・一・六	二〇	六一	五六	五	八・一	二・〇〇〇	四・八〇〇	＋一四〇・〇	＋三一八・五	二〇・〇〇〇	一・一二〇
一八・一・七	一〇	七七四	三七三	四〇〇	五一・六	六・〇〇〇	一三・〇〇〇	＋一二六・六	＋三七二・五	七・七五三	二・七五一
計		八三五	四二九	四〇五	四八・五	八・〇〇〇	一七・八〇〇	＋一三八・三	＋三五九・八	九・五八〇	三・八七一
一七・二〇・九	二〇	二〇〇	一九六	四	二・〇	四・〇〇〇	一一・〇六〇	＋一七六・五	＋一八二・一	二〇・〇〇〇	三・九二〇
一七・八・五	一〇	五六七	四九五	七二	一三・八	四・〇〇〇	一〇・四〇〇	＋一六〇・〇	＋一九七・八	七・〇五四	三・四九二
計		七六七	六九一	七六	九・九	八・〇〇〇	二一・四六〇	＋一六八・二	＋一八九・五	一〇・四三〇	七・四一二
一七・二〇・九	二〇	二〇〇	一八九	一一	五・五	四・〇〇〇	一三・二〇〇	＋二三〇・〇	＋二四九・二	二〇・〇〇〇	三・七八〇
一八・二〇・四	一〇	五七一	四六九	一〇二	一七・八	四・〇〇〇	一六・六八〇	＋三七・〇	＋四〇七・七	七・〇〇五	三・二八五
計		七七一	六五八	一一三	一四・六	八・〇〇〇	二九・八八〇	＋二七三・五	＋三三一・九	一〇・三七六	七・〇六五
一七・二五・五	二〇	二〇〇	一八二	一八	九・〇	四・〇〇〇	六・二六〇	＋五六・五	＋七一・九	二〇・〇〇〇	三・六四〇
一七・九・七	一〇	六〇九	四七一	一三八	三三・六	四・〇〇〇	九・九六〇	＋一四九・〇	＋三三一・六	六・五六八	三・〇九三
計		八〇九	六五三	一五六	一九・二	八・〇〇〇	一六・二二〇	＋一〇二・七	＋一四〇・九	九・八八八	六・七三三
一七・三〇・五	二〇	二〇〇	一〇三	九七	四八・五	四・〇〇〇	八・〇〇〇	＋一〇〇・〇	＋二八八・三	二〇・〇〇〇	二・〇六〇
一八・三〇・五	一〇	六〇九	三九一	二一八	三五・七	四・〇〇〇	一〇・七〇〇	＋一六七・五	＋三二六・六	六・五六八	二・五六八
計		八〇九	四九四	三一五	三八・九	八・〇〇〇	一八・七〇〇	＋一三三・七	＋三〇四・〇	九・八八八	四・六二八

植付月日 收穫月日	種薯種別	植付株數	收穫株數	減株數	減株率	植付量	收穫量	總植付量ニ對スル增減率	殘存株數ノ植付ニ對スル收量增減率	植付一株ノ平均重量	殘存株ノ總植付量
		株	株	株	%	瓩	瓩	%	%	瓦	瓩
一七・四・二	二〇	二〇〇	一三一	六九	三四・五	四〇〇・〇〇〇	五六・〇〇〇	＋ 四〇・〇	＋ 一二・七	二〇・〇〇〇	二・六二〇
一七・一〇・七	一〇	一、三〇二	五四五	六五七	五四・六	四〇〇・〇〇〇	五六・七〇〇	＋ 四一・七	＋ 二一・三	二〇・〇〇〇	一・八一三
計		一、四〇二	六七六	七二七	五一・七	八〇〇・〇〇〇	一一二・七〇〇	＋ 四〇・八	＋ 一五・四	二〇・〇〇〇	四・四三三
一七・四・二	二〇	二〇〇	一六一	三九	一九・五	四〇〇・〇〇〇	八九・〇〇	＋ 一三・五	＋ 一七・四	二〇・〇〇〇	三・二一〇
一八・四・一一	一〇	一、一〇一	五四三	六六〇	五四・九	四〇〇・〇〇〇	五九・〇〇	＋ 四七・五	＋ 三三・三	二〇・〇〇〇	一・八〇三
計		一、四〇三	七〇三	六九九	四九・八	八〇〇・〇〇〇	一四八・〇〇	＋ 八五・〇	＋ 一九四・二	二〇・〇〇〇	五・〇一三
一七・五・八	二〇	二〇〇	一九〇	一〇	五・〇	四〇〇・〇〇〇	五四五〇	＋ 三六・二	＋ 四三・七	二〇・〇〇〇	三・八〇〇
一七・一一・四	一〇	八六四	七五七	一〇七	一二・三	八〇〇・〇〇〇	一〇五五〇	＋ 二七・五	＋ 四九・三	二〇・〇〇〇	三・四一五
計		一、〇六四	九六四	一一七	一一・〇	一、二〇〇・〇〇〇	一六〇・五〇	＋ 三二・八	＋ 四六・一	二〇・〇〇〇	七・二一五
一七・六・二	一〇	二〇〇	一六四	三六	一八・〇	四〇〇・〇〇〇	五五〇〇	＋ 三七・五	＋ 六七・七	二〇・〇〇〇	三・二〇〇
一七・一二・七	一〇	一七一	四七〇	一〇一	一七・六	四〇〇・〇〇〇	六八五〇	＋ 七一・二	＋ 一〇八・八	二〇・〇〇〇	七〇〇五
計		一七一	六三四	一三七	一七・七	八〇〇・〇〇〇	一二・三五〇	＋ 五四・三	＋ 八七・九	二〇・〇〇〇	二・五九六

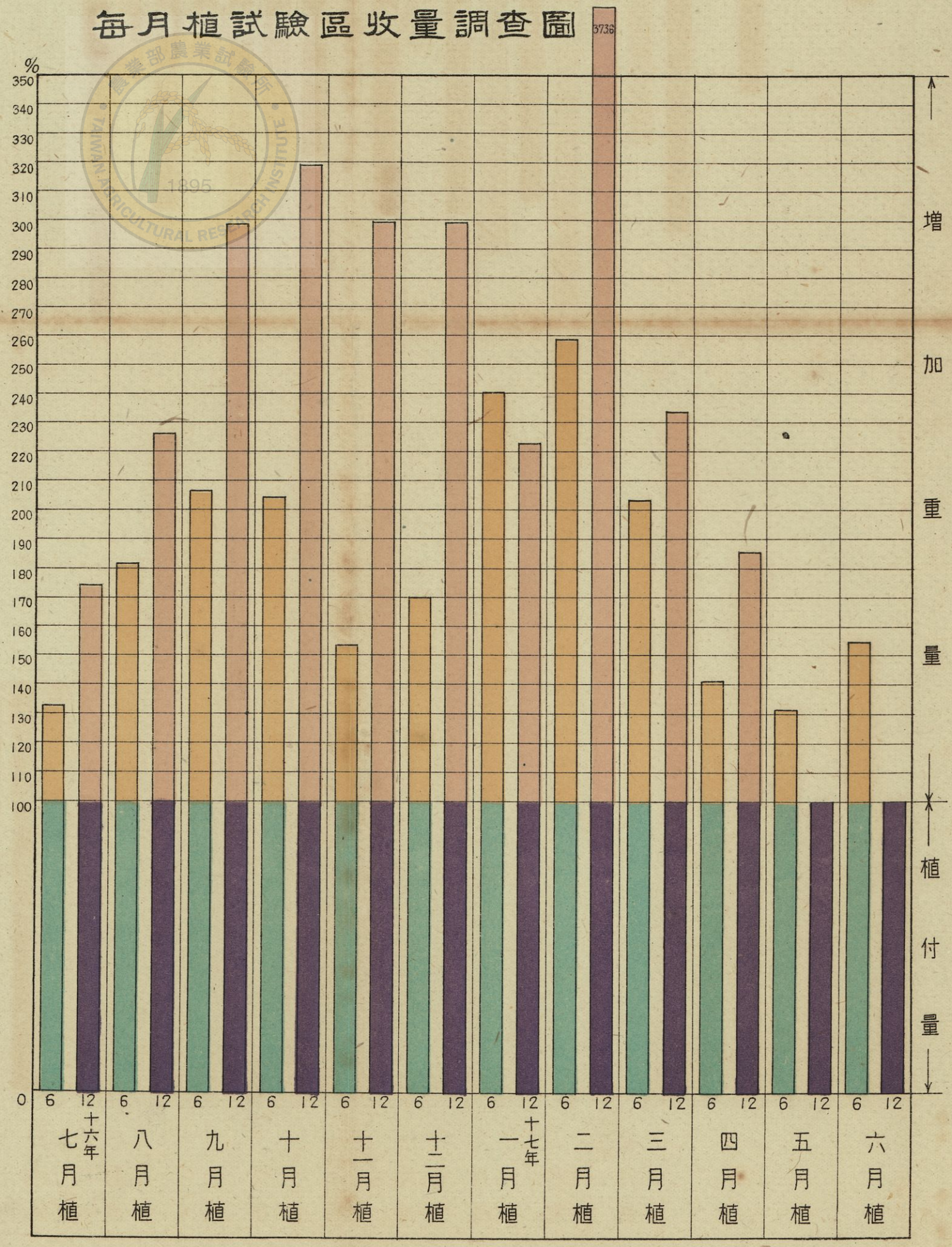
毎月植試驗蔓伸長狀況ヲ示ス

化研生藥高雄農場

農業部農業試驗所 TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE 1895



每月植試驗區收量調查圖



右第一表及グラフに於て觀察し得る通り何れの月に於て植込みたるものも大體十一月頃に地上の繁茂を見、其の後低下し二月より三月の間に於て地上部は殆んど生育を停止し爾後再び生育を開始し、五月に至つて地上繁茂の最盛期となり、更に生育は衰へ九月に至つて地上部の活動は休止するのを認めたのである。之に依つて玉唉の一生育期間は凡そ三箇月にして春、秋二回の生育時期があることを知ることが出來た。依つて地上の生育の停止した二月及び九月の頃に收穫し同時に植込みを行ふを得。卽ち年二回の栽培が可能であると認定した。

更に此の事實は毎月植六箇月後と一箇年後の收量表及び圖に依つて見る如く、地上莖葉の生育停止した二月及び九月の頃に植付をしたものが六箇月後の收穫に於ても、又一箇年後に於ても最大の收量を示し、植付時期を決定することを得た。尙一箇年繼續栽培の收量は必ずしも年二回栽培の收量の和より大でないことが明らかにして、年二回栽培の方が種薯選別卽ち優良種薯淘汰を度々行ひ得る點に於て栽培費增加の不利を補ひ得て餘りあるものと認められる。

二、栽植密度試驗（第二回）

一定面積に對する絶對收量の大小は、種薯栽植の密度に關係多かる可きを以て、其の粗密の限度を知らんが爲め前年度同樣（第三回要錄參照）の試驗區を設置し試驗せる結果は左の如くである。

第二表　栽植距離試驗成績（高雄農場）

栽植	植付間隔	種薯の大小	五間畦甲當畦數	甲當種薯量	甲當收量	增減量 甲當增加量	增減量 增加率	腐敗
	尺寸 寸分	瓦	畦	斤	斤	斤	%	%
粗植	二五×六五〇	一〇	一四〇八（五）	六四七·六八〇	二九九八六六	二三六二一八六	三四九·一	一二·〇
	二五×四二〇	一〇	一四〇八（四）	九八五·六〇〇	二三三三·一〇〇	一三七·六〇〇	一三五·七	四四·三
	二五×二一五	一〇	一四〇八（三）	一九七一·二〇〇	四九二八·〇〇〇	二九五六·六〇〇	一五〇·〇	一七·八

	植付間隔	種薯の大小	五間畦甲當畦數	甲當種薯量	甲當收量	增減量 甲當增加量	增減量 增加率	腐敗
	尺寸 寸分	瓦	噸	斤	斤	斤	%	%
一列植 密植	二·〇×六·五〇	一〇	(四) 一七·六〇	八〇九·六〇〇	三·七五四·六六〇	二·九五四·〇六〇	三六·三·六	一〇·八
	二·〇×四·三〇	一〇	(五) 一七·六〇	一·二三二·〇〇〇	二·五四八·〇〇〇	一·三四九·三三〇	一〇九·四	四八·五
	二·〇×二·一五	一〇	(九) 一七·六〇	二·四六四·〇〇〇	八·二六六·一三〇	五·八〇二·一三三	二三五·四	八·五
	一·五×六·五〇	一〇	(三) 二·三四七	一·〇七九·六〇〇	五·三·九·八六六	四·二四〇·二四〇	三九二·六	〇
	一·五×四·三〇	一〇	(八) 二·三四七	一·六四二·九〇〇	一·七二·一三三	二三四·七〇〇	一〇·四	五·八五
	一·五×二·一五	一〇	(三) 二·三四七	三·二五八·八〇〇	八·〇五八·〇三〇	四·七七二·三三〇	一四五·二	一·六四
	平均			一·五六八·七九〇	四·四二五·四三	二·八七七·七九三	一八七·二	二·三五
二列植 粗植	二·五〇×六·五〇	一〇	(一) 七〇〇	六四四·〇〇〇	三·五〇〇·〇〇〇	二·八五六·〇〇〇	四四三·四	九·七
標準密植	二·五〇×四·三〇	一〇	(二) 七〇〇	九八〇·〇〇〇	四·九〇〇·〇〇〇	三·九三〇·〇〇〇	四〇〇·〇	一〇·七
	二·五〇×二·一五	一〇	(四) 七〇〇	一·九六〇·〇〇〇	八·四〇七·〇〇〇	六·四四七·〇〇〇	三三八·九	一一·七
三列植 粗植	一·七〇×六·五〇	一〇	(一六) 七〇〇	九六六·〇〇〇	一·八四〇·〇〇〇	九九四·〇〇〇	一〇二·八	四·三
標準密植	一·七〇×四·三〇	一〇	(〇) 七〇〇	一·四七〇·〇〇〇	四·八三〇·〇〇〇	三·三六〇·〇〇〇	二三八·五	〇
	一·七〇×二·一五	一〇	(七) 七〇〇	二·九四〇·〇〇〇	五·六〇〇·〇〇〇	二·六五〇·〇〇〇	九〇·四	一四·五
四列植 粗植	一·二五×六·五〇	一〇	(一) 七〇〇	一·二八八·〇〇〇	三·五四〇·〇〇〇	二·二五六·〇〇〇	一九八·九	二三·九
標準密植	一·二五×四·三〇	一〇	(六) 七〇〇	一·九六〇·〇〇〇	八·六八〇·〇〇〇	六·七二〇·〇〇〇	三四二·八	一二·五
	一·二五×二·一五	一〇	(八) 七〇〇	三·九二〇·〇〇〇	一三·四四〇·〇〇〇	九五二·〇〇〇	二四二·八	一〇·七
	平均			一·七九二·〇〇〇	六·一二九·六六六	四·三三七·六六六	二四二·〇	一一·〇

不發芽原因調查表

化研生藥高雄農場

凡例
地下發芽
地上發芽
腐敗
損傷
肥大狀態

% %
200 100
180 90
160 80
140 70
120 60
100 50
80 40
60 30
40 20
20 10
0 0

地下成績
地上成績

長全形 一面調查 二面調查 三面調查
長頭部 一面調查 二面調查 三面調查
長胴部 一面調查 二面調查 三面調查
長尾部 一面調查 二面調查 三面調查
丸全形 一面調查 二面調查 三面調查
丸頭部 一面調查 二面調查 三面調查
丸胴部 一面調查 二面調查 三面調查
丸尾部 一面調查 二面調查 三面調查

平均成績
長全形 長頭部 長胴部 長尾部 丸全形 丸頭部 丸胴部 丸尾部

肥大狀態
長全形 長頭部 長胴部 長尾部 丸全形 丸頭部 丸胴部 丸尾部

↑增加量↓植付量↓

備考　太線以下は五間に五尺幅の平畦に二列又は三列、四列等に植えるものなり
（）内太文字は増加率より見たる成績順位

右の成績に於て觀察すれば、畦幅五尺の平畦に二尺五寸の條間を以て株間五寸程度に栽植したもの（高雄農場標準植）が最も増加率大であるのを認めた。

三、不發芽原因調査試驗

從來玉唉ツヴラフヂの栽培期間を通じて毎月一定時に地上の生育株數を調査したところに依れば、何れの調査に於ても四〇%、五〇%の缺損株が認められ、其の原因の探究及び對策は重要なる事項なる可きを以て先づ其の原因を知らんが爲め、玉唉種薯の長形なるものと丸形のものを選び其の各々につき全形、頭部、胴部、尾部の四部位につき各一定數を植込み、一栽培期間中前後三回地上部と地下部を調査した結果は左の如くである。

右の調査に依れば地上の觀察に依りて缺株と認められるゝものゝ内には

イ　塊根の腐敗せるもの

ロ　地下に於ては發芽し居るも地上に未だ芽を出さゞるもの

ハ　一度發芽せるも何等かの傷害に依り芽を失ひたるもの

ニ　植込當時の狀態にて其のまゝ休眠狀態にあるもの

に分ち得べく、（ハ）に屬するものはコーロギ等の發生期と密接の關係があるべく、（ニ）に屬するものは種薯の選別又は他の發芽促進の方法に依つて處理すべきものにて、今後栽培上特に留意すべきものと認められる。又之は丸型の種薯を用ひたる場合に多く、全型のまゝの種薯を用ひたる場合は丸型、長型共に切斷せるものに比し多きを認めたのである。

四、種薯の部位と收量の關係

牛蒡狀の子薯を切斷して種薯に供する場合、其の頭部と中央部(胴部)及び尾部の何れが肥大率が大であるかを調査する目的を以て、昭和十七年九月に植込みたるものに就き昭和十八年四月下旬試掘調査せるに左記の成績を得た。

種薯の部位と收量との關係調査　植付　昭和十七年九月
收穫　昭和十八年四月

種薯の部位	頭部	胴部	尾部	計
調査畦數	八畦	八畦	八畦	二四畦
調査面積	三五坪	三五坪	三五坪	一〇五坪
植付量	一二・八瓩	一二・八瓩	一二・八瓩	三八・四瓩
收穫量	三七・八九〇	三八・三八〇	三五・二四〇	一一一・五〇〇
減收率	二五・〇九〇	二五・五八〇	二三・四四〇	七三・一一〇
增減率	一九六・〇〇〇%	一九九・八〇〇%	一七五・三〇〇%	一九〇・三〇〇%

增加部位　各部種薯總增加量に對する比率

增加部位 / 種薯の部位	頭部	胴部	尾部	計
種薯	＋ 一五・六八〇(六〇・一)	＋ 一五・二八〇(五九・八)	＋ 一四・九八〇(六六・七)	＋ 四五・三四〇(六二・一)
子薯	＋ 九・二五〇(三六・四)	＋ 九・六四〇(三七・七)	＋ 六・九六〇(三一・一)	＋ 二五・七五〇(三五・三)
細根	＋ 〇・八六〇(三・五)	＋ 〇・六五〇(二・五)	＋ 〇・五〇〇(二・二)	＋ 二・〇三〇(二・七)
計	＋ 二五・六五〇(一〇〇・〇)	＋ 二五・五八〇(一〇〇・〇)	＋ 二二・四四〇(一〇〇・〇)	＋ 七三・一一〇(一〇〇・〇)

右調査の成績によつて認められる傾向は

總增加量に於ては　胴部↓頭部↓尾部　の順位
種薯自體の肥大は　尾部↓頭部↓胴部　の順位
子薯の出來高は　胴部↓頭部↓尾部　の順位
細根の出來高は　頭部↓胴部↓尾部　の順位

但し胴部と頭部との間に於ては確然たる差異を認めず。

五、圃場別調査

高雄農場昭和十七年度に於て栽培收穫せる三八圃、間作を除きたる實面積一四甲に於ける成績中、種薯別に成績を示せば、適格種薯を用ひたるものは二・一九倍、準適格種薯は一・九倍、不適格種薯に於ては僅かに〇・四倍の成績を示した。

三八圃中東七區三圃の如きは半歸年の栽培により三・六倍の好成績を示したるも、此の圃の植付は十七年九月中に植ゑたるものと十月に至りて植込みたるものと相半ばし其の平均の收量にして、之を詳細に區分すれば左表の通りである。

東七區三圃收量調査表

植付月日	種別	畦數	面積	植付重量	收穫重量	增減量	收穫率
收穫月日							
一七・九・二三 一八・三・二五	適格	九〇 畦	〇・一四四〇 甲	一四四・〇〇〇 斤	七二四・八八〇 斤	＋五九〇・八八〇 斤	五〇・三 %
一七・一〇・一二 一八・三・八・一九	適格	八〇	〇・一二八〇	一二八・〇〇〇	三二四・二〇〇	＋一九六・二〇〇	二五・三
一七・九・四・一五 一八・三・六・一七	準適格	六〇	〇・〇九六〇	九六・〇〇〇	二八三・〇〇〇	＋二八七・〇〇〇	二九八・九
合計		三三〇	〇・三六〇〇	三六八・〇〇〇	一、四四二・〇八〇	＋一、〇七四・〇八〇	二九一・八

備考	土質	砂質壤土
	乾燥狀況	乾燥期に至りても圃場全面に灌水するを得
	前作物	甘藷、黃麻
	一畦面積	幅員一・七米、長さ八・六米
	堆肥量	甲當一六、〇〇〇貫
	除草回數	五回
	敷藁有無	有

九月植に於ては五・一倍の好成績を示し、其の內特に優秀なる畦は三・二瓩を植付けたるもの二一瓩に達し實に六・五倍の收量を示したのである。一個體としての優秀なるものは六五倍以上のものも多數あり、種薯選擇の實に肝要であるのを認めたのである。

鎭目技師（臺灣生藥株式會社）

紅頭ツヅラフヂのアルカロイド含有量に就て

紅頭ツヅラフヂの莖のアルカロイド含有量は老莖に多く若莖に少なきは既に昨年の座談會席上分析結果を發表した通りであるが、果して何年生のものが玉唉ツヅラフヂの夫と大體同程度に達するかと云ふことは今後の試驗の結果を待たざれば判然とは申上げられないが、先づ少くも三年以上經過せざればと豫想して居る次第である。

化研生藥株式會社高雄農場より試料を得て分析せる結果は次の如くである。

試料	風乾物水分	風乾物含量	無水物含量
一年生莖	一三・五%	〇・四四〇%	〇・五〇九%

二年生葉	一二・三	○・五四○	○・六二五
綠葉	一四・二	○・四三五	○・五○七
黃變せる葉	一一・五	○・四○二	○・四五四
落葉	一○・一	○・三九○	○・四三四

玉唉ッヅラフヂのアルカロイド含有量に就いて

玉唉ツヅラフヂのアルカロイドは栽培條件を同一にせる資料につき分析せる結果より推して自生も大差無きもの丶如くである。肥料殊に窒素肥料はアルカロイドの増量に影響あるものと豫想され、目下試驗中にして次回に發表する考である。

玉唉ツヅラフヂアルカロイド試驗成績

試料	風乾物水分	風乾物含量	無水物含量
新苗(子薯)を種薯に一回使用せるもの 根	一一・六%	一・二一○%	一・三六九%
同二回使用せるもの 根	一三・五	一・○六一	一・二七七
同 莖葉	一一・三	一・九八○	二・二三二

增田支配人（臺灣農事株式會社）

一、試作地の狀況

(一) 試作地の所在

臺中州新高郡魚池庄鹿篙

同　州能高郡埔里街桃米坑珠子山

(二) 標高及び地勢

六〇〇米乃至八六〇米、全面傾斜地、山勢概ね擴散狀をなし殆んど開墾園地となせしため水源乏しく灌漑の便なし。

(三) 土壤

砂質壤土、全般的に表土流失し腐植尠く荒廢せる場所多し。

(四) 氣象狀況

省略

二、間作試驗

(一) 桐林間作試驗

桐樹種は薄葉桐、植付後三、四年生株の根元を中心として約三尺半徑を以て各株二〇箇宛を植付した。

區別	桐植付間隔	傾斜方向	日射度	供試桐株數	植付時期 年月日	收穫時期 年月日	種薯種類及び重量	種薯豫措	種薯量	收穫量	倍率
第一區	一八尺×一五尺	北面	午前中相當量あり	株 八〇	年月日 一七・一・二〇	年月日 一八・二・二〇	切斷薯 三・六〇瓦	ウスプルン消毒〇・一%液	斤 三六・二〇〇	斤 五〇・一八七	倍 一・三九
第二區	一八尺×一五尺	東北面	相當量あり	一四三	一七・一・三一	一八・二・二〇	同 三・一七瓦	同過マンガン酸加里消毒一・〇%液	六〇五四〇	六六・四八七	一・〇九
第三區	一八尺×一八尺	東面	少し	八八	一七・二・五	一八・二・二七	同 三・七四瓦		三六・五〇〇	三四・四六三	〇・九四

桐間作試驗區は前記以外に數區あるも成績一般に不良である。夫は管理が粗放であるのと又桐の如く生育迅速なる植物に於ては地力の消耗甚しく、亦淺根性にして表面に太根縱橫に張りつむるため弱小植物は壓倒されるためならんかと思惟される。

（二）茶園間作試驗

第一區は樹齡四年生、第二區は一年生にして品種は共にアツサム種である。

區別	茶植付間隔	傾斜方向	植付時期	收穫時期	薯種類	種薯豫措	植付株數	收穫株數	種薯量	收穫量	倍率
第一區	五尺×二尺五寸	南緩傾斜面	一七・三・二三	一八・二・二五	全形小薯	過マンガン酸加里液消毒一%液	三〇〇	一八三	一四二〇	六九七五	四九一
第二區	五尺×二尺五寸	南緩傾斜面	一七・四・三〇	一八・三・三	切斷薯	同	三〇〇	一四七	三六五〇	六〇三三	一六五

（三）綠肥間作試驗

綠肥作物テフロシヤキヤンテイグの間作に玉唉ツヴラフヂを植付せしも、植付時期遲れしと切斷薯を種薯として用ひし爲か倍率一・六倍にして成績不良であつた。

三、種薯大小に依る發育收穫試驗

種薯種類	形狀	種薯重量	植付月日	掘取月日	收穫株數	收穫重量	倍率	摘要
		瓦	年月日	年月日	株	瓦	倍	
細根		一七	一七・三・二三	一八・二・一〇	八	一三三	七・二四	
五—一〇瓦	全形	八三	一七・三・二三	一八・二・一〇	九	六七五	八・三	
二〇—三〇瓦	長、切斷	二七四	一七・三・二三	一八・二・一〇	六	一〇三〇	三・七五	切斷薯の爲か腐敗株多し

種薯種類	形狀	種薯重量	植付月日	掘取月日	收穫株數	收穫重量	倍率	摘要
		瓦	年月日	年月日	株	瓦	倍	
三〇瓦	全形	二九	一七・二・三	一八・二・一〇	九	二八五〇	九・八三	最大株は 六八〇瓦
五〇瓦	同	四八七	一七・二・三	一八・二・一〇	七	二〇三〇	四・一五	白絹病一株發生途中掘取廢棄
一〇〇瓦	同	一〇一三	一七・二・三	一八・二・一〇	一〇	二八六二八	二・五九	
二〇〇瓦	同	一、九三七	一七・二・三	一八・二・一〇	九	四〇七〇	二・一〇	
五〇〇瓦	同	四七三〇	一七・二・三	一八・二・一〇	一〇	五八六三	一二四	

備考　供試株數　一區一株宛
　　種薯處措　過マンガン酸加里一%液にて消毒
　　肥料　菜種油粕二回(施用時期、量不明)
　　其の他　敷藁、庇陰なし、竹枝にて支柱設置、ウドン粉病發生せるに依り四斗式石灰ボルドー二回撒布

四、敷藁試驗

試驗區別	種薯重量	植付月日	收穫月日	收穫株數	收穫重量	倍率	摘要
	瓦	年月日	年月日	株	瓦	倍	
稻藁一瓩	二一〇	一七・二・三	一八・二・一〇	六	六〇五	二・八八	敷藁に病菌ありしか腐敗株多く成績芳しからず
同二瓩	一九八	一七・二・三	一八・二・一〇	七	七五〇	三・七九	
籾殻一瓩	二〇三	一七・二・三	一八・二・一〇	九	一、六二二	七・九八	
同二瓩	二〇七	一七・二・三	一八・二・一〇	八	一、〇八三	五・三三	
綠肥專用	二〇三	一七・二・三	一八・二・一〇	一〇	一、八七五	九・二四	

備考　綠肥區はテフロシヤキヤンテイダー、カシヤミモソイテス等の枝刈り數回根元に敷草をした。一回量は不明であるが相當多量に施した。其の他種薯大小試驗の備考に同じ。

農業部農業試驗所
TAIWAN AGRICULTURAL RESEARCH INSTITUTE
1895

原書缺頁

Taiwan
102



33